藏書

統一

第百七十四號

目次

○佛教の卓越せる所以　大審正　本多日生
○鎌倉時代の人情　文學士　川上多助
○國力護持論　田中智學
○布教術の一要素　井村日威
○啾々錄　篁堂
○片瀬たより　青村
○報道廣告等

統一主義佛教大演說

八月二十七日
午後七時より
於品川町妙蓮寺

開會の主旨　中原遙應師
如來の室　石川顯隆師
人中の寶　笹川眞應師
日蓮上人の眼觀　關田養叔師
即身成佛論　今成乾隨師

八月二十九日
午後一時より
於淺草新谷町慶印寺

一切衆生の依止處　也根日東師
實行論　鈴木日雄師
活ける佛教　關田養叔師
活現の意義　笹川眞應師

九月十二日
午後一時より
淺草北清島町常林寺に於て

佛教論　吉田堅晴師
法華經中心の要旨　笹川眞應師
本尊の實義實二　關田養叔師
偉人の言に聞け　山根日東師

其他九月十二日は品川町妙國寺に於て、同十九日は谷中初音町の本授寺に於て、同廿七日は品川町本光寺に於て各辯士諸師の演說があります、

佛教の卓越せる所以

（四月十六日鬼山本行寺庫裡成道式に於て）

本多日生講演
中川事顯筆記

今此の演題に就きて論ぜんには旁幾多の條項を掲げて論せざる可からざるも、徒に條項を列擧するは予の本旨にあらざると共に、其細微の點を一々詳論することは一場の演說の到底能くする能はざる所なれば、尤も重要なるもの數個を擧げて聊か佛教の卓越せる所以を說明せんとす

卓越とは特長の意義なり、抑々佛陀五十年の長きに亘りて宣說せられたる幽玄なる佛教は、啻に他の宗教に對して卓越せるのみならず或は哲學に對し其他百般の科學に對して超越す之に生命、活動の能力を授け、更に人生に光明あらしむるものにして、恰も嚇々たる日輪の衆星の光を壓して全地球を照らせるが如きものなり

凡そ之の廣博深遠なる佛教を研鑽するに當りては須らく先づ始め華嚴より終り涅槃に至る大藏全體を一貫せる根本義を攝捉し來たらざる可からず、さなくして徒に局部の一經一論を以て其枝葉飛沫を穿索し、佛教の眞髓を窺はんとするが如きは思はざるの甚だしきものにして其の正鵠を得可からざるや明なり、されば予はかゝる徒輩と共に此の大問題を論究せんとするものにあらず、盲者撫象の謬見は予の全然採らざる所、予は佛教全般に亘れる統一的見地より堂々たる見解の上に立ち經王たる法華經の教義批判の標準として玆に之れが解決を試みんとするものなり

一　佛教は智悲圓滿の大宗教なり

佛教は實に智悲何れの方面より見るも完全無缺の大宗教なり、勿論如何に卑近なる宗教にもあれ幾分かは智悲の二面を有す例せば天理教の如き迷信の域にあるものと雖も尙且多少は斯くの如き意味を包含せり、されば先づ此事を論ずるに當りては尤も嚴正なる批判吟味を遂げざる可からず、今予の論ぜんとする所は全世界の人類が欲求せる哲學と宗教との調和、理性と感情と

の融合に對する希望が遠く三千年の昔釋迦牟尼に依りて解決されたることを證せんとするものなり

理性を盲目にして感情に奔れる宗教は二十世紀の今日吾人の欲求を滿足せしむるに足らざる事は既に世の識者の等しく認むる所にして、彼の基督教の或る者が感情のみを滿足せしめ吾人の尊重す可き理性を滅却せんとするは誤謬の尤も甚だしきものとす

ギリシヤの古聖アリストートルが「豚となつて滿足せんよりは寧ろ人となつて煩悶せん」と唱破せるは誠に千古の格言なり、カントは理性批判と實踐批判の二つを以て二個の批判の標準を示せるが吾人は其の間に合せの說を拒否して大宗教は必ず理性と感情とを併せて滿足せしむべきものたらざるべからずと主張するものなり、或る人は曰ふ「哲學者たらんとすれば宗教家たる能はず、宗教家たらんとすれば哲學者たる能はず、知力と信仰、理性と感情とは兩立する能はざるものなり」と其愚や及ぶ可からず

基督教に於ては如何に巧妙なる解釋を試むるも人と神と宇宙とを調和して一元に歸着せしむることは全然不可能の事にして、元來基督教は其根底を二元論におきて組成せられたるものなれば一元哲學の贏ち得たる今日に於ては最早眞理上の價値を認むる能はざること明なり、されば吾人の信賴す可き宗教は理性と感情との一致を意味し、又人格の修養にも信と智との調和を目的とし、更に文明の意義も文質彬々たる上に築かるる可からず、佛陀の敎は此の調和融合に於て始めより完備せるもの、其は釋尊の人格其者が明かに之れを表示せり

彼の基督教徒が基督は何等の思索何等の學究なくして唯神の靈感に觸れ熱情的宗教を感得して之を宣傳せりと云ひ之を以て誇りとなすも斯くの如きは實にあはれむ可き言ひ分にして公平なる眼識よりせば基督は無智無學にして理性の上に欠くの所ありと斷定せざるを得ず。之に反して釋尊は七才既に學に通じ進んで百般の研學に身を委ね給ひぬ、當時印度の文明たる物質的進歩に於て今日に劣ると雖も哲學的宗教的方面に於ては

非常に進歩せるものありしは何人も否む能はざる所にして釋尊は當時研鑽すべき學問は悉くそれが蘊奥を極め更に太子の位を捨て、當時の哲學者宗教家を歷訪し研鑽功を積み春秋茲に三十有五豁然として大悟し成道し、其の研磨蘊蓄せる大智は一轉して衆生濟度の大慈行願の活動を起し縱橫無礙の大法輪を轉じ給ひしなり

之の大智惠者にして同時に大慈悲者たる佛陀の御口を通ふして宣說せられたる法義に結集せられて茲に數千卷の大藏經となれり

かくて無上菩提の道場に端坐し給へる佛陀はこゝに天地法界の根本實相を看破し給ひて實智を成就し、又衆生濟度の上に於ける方便權智の用道を併有し、上中下根の衆生を一味平等に均霑し給ひぬ、斯くて散說せられたる四十餘年の諸經諸論は佛陀降世の本懷たる法華經宣說の準備に外ならざりしなり、然るに言を應病與藥にかりて權智用道の一部を捉へ來りて完全なる統一意趣の佛敎をして故らに漠然散漫たるものとなし其大綱眞髓を忘失し之れを滅裂的に信奉するが如きは玉を捨てゝ瓦を拾ふものと謂つ可し

元來吾人は一應之を見れば上中下根の機類に分かれたりと雖も其本性本質を徹見すれば全く一にして決して差異あるにあらず然るに徒に表面の差異のみを見て其本体の一体不二なる事を覺らざるに至りては又思はざるも甚だし、茲に例せんか井を堀るに一丈にして水を得るものあり、二丈或は三丈にして水を得るものありきれど何れの處にも水を得るは一なり、佛敎は實に之の滾々盡きざる源泉に到達せんことを敎ゆるものにして此の源泉とも云つ可き吾人本体の佛性の顯動は法華經壽量品の信仰を得て始めて喚發せらるべきなり

慈悲に於ては絕對隨應の二者を具す前者は吾人に成佛得脫を敎へて菩提の岸に到達せしめんとし、後者は生に於ける吾人に今日唯今よりして慰樂を與ふるものなり、故に佛陀の出世は右に成佛得脫を敎ゆると共に、左に人生に光明あらしめんとして出て給ひしなり「世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ」とは之の謂にして所謂「現世安穩後生善處」は法華經の大理想ならずや、

かく如來の大慈は萬代不易無始常恆なれば時代の如何を問はず能く人生の機微に隨應せる活動を起し能く活社界と調和して一つも乖戻するものにあらず、法華經に云ふ「治世語言資生業等皆順正法」と又聖日蓮は曰ふ「宮仕を法華經と思召せ」と吾輩佛徒たるもの宜しく之を信受して味識し奉る可し

二　佛教は法佛不二の人格實在の大宗教なり

法と佛とは道と佛との意にして佛教は之の兩者を圓滿に調和し智慧あり慈悲ある佛陀の實在を教ゆるものなり、基督教に神の恩寵を說くと雖も其本体の說明に至たりては何等明確なる解說を附する能はず、彼等は唯宇宙に瀰滿せる漠然たる雲の如く煙の如きものを認めて神と稱するのみにして神の實在人格を明答せんは到底彼等の能ふ處にあらず、佛教に於ても念佛宗の彌陀の說明眞言宗の大日の如き亦之と軌を一にして何等特出す可き處あるなし、近代我國の有名なる學者にして佛を聲なりとなし或は無色にして空氣の如き作用を爲すものなりと說くものあり、其思想の稚劣なる實に基督教と同一誤謬に陷れるものにあらずや、近時基督教も二三の學者の研究に依り神の人格實在を說明せんとするも未だ何等の得る處なし、唯實踐的批判に訴ふるに過ぎざるなり、哲學者の宇宙を論ずるに必然的機械論と有意志的目的論とあり、予は前者に偏せずされど全然后者に黨するものにあらず、佛教は茲に宇宙に瀰滿せる暖かき圓慈を認む佛陀とは其の圓慈の全般を吸收して体現せる人格實在之れ也、更に宇宙に形式ありと之れが吾人を最も悅ばしむるものにして假令宇宙には充實せる圓慈ありとは云へ、彼の禪僧の如く一圓相のみを書き來たりては吾人は其處に美を感ぜずしては滿足することを得るものにあらず、されば又之の宇宙全般の美を吸收体現せる佛陀は所有一切の世間美を超越し三十二相八十種好を具足せる妙体にして其の國土の美も吾人の想像の及ばざる所なり

眞に佛陀とは宇宙一切の眞善美を吸收体現し不斷の活動を起し暖かき手を以て吾人人類の救濟に全力を盡くし給へるものにして所謂「如來秘密神通之力」とは是れなり

三　佛教は生佛不二の具存一体教なり

吾人と佛とは其の本体に於て一体不二にして吾人は本有の如來性を具するものなり、之の問題も基督教に於ては大に其解決　苦み神に造られたる吾人の祖先がエデンの園に於て毒蛇に誑らかされ神の怒に觸れて罪の子と墮落したるも悟性を開くに依りて吾人も亦神の子となり得るものなりと一時の說をなして其の缺陷を補はんとつとむとは云へ、公正なる議見の上より基督教は神の全智全能を說くに止まり何等吾人の價値を說くものにあらずと斷言するに憚らざるなり、獨のハルトマン曰く「基督教は地盤を固むる事に日を暮らせるものなり」と予は寧ろ粗惡なる屋宇を作るに汲々たるものにして地盤を固むる事に何等の注意をも拂はざるものなりと言はん、佛教も小乘教に於ては唯吾人の何たるかを研究せんとして日を暮らせるものあるを見る、禪家の如きは徒に心の練磨に孜々として佛陀に對する觀念の確固たるものあるなし、法華經に於ては兩者相待つて完全に說き盡くされ、佛と吾人との間には唯佛陀は先覺者にして光皎々たる滿月の如し吾人は迷者にして三日月の如き差異あるのみ、法華經は此の間の消息を明にして開佛知見を吾人に敎ゆるものなり、玉かけながら迷ひぬるとは吾人衆生の狀態なり窮子なりとは云へ本來長者の嗣子たる吾人は一大覺醒をなすと共に直に長者の嗣子となり得るものなり、されど基督教に於ては吾人は終始罪の子、神は獨り永久に神にして其間懸隔書然たるものあり吾人罪の子は無限の時間を經るも遂に神と合致する事能はざるものなり

四　佛教は統一神教なり

一神教とは唯一の神を認むるものにして多神教とは散漫たる無數の神の活動を個々別々に認むるものなり、世の文明は多神教より一神教に推移するものにして、假に佛教が世人の誤解せるが如き散漫たる多神教なりせば其は基督教より劣れるや論なし

更に多神教の內に於て交替神教の如きは有害無益のものにして、苟しくも慈愛の念ある世の父母すら其愛子

の腹痛を見て之に與藥し看護に手を盡くし其の頭痛を見て稍手傍觀するが如きものあり得可からず、況や滿滿なる慈悲に充たされたる神佛を斯くの如く変替的に認めて以て信仰を捧ぐるが如きは實に不合理の甚だしきものにして又神の尊嚴を汚すものと謂つ可し

基督教の神は唯一神教とは云へ餘りに孤獨なる獨一神にして、假に彼れが教條に依れば我國の皇祖神明も必ず一度彼れが神前に洗禮を受けざれば永久に罪の子なりと云ふが如きは禮なきも又甚だしからずや、されど法華經に教ゆる所は秩序整然たる統一神教にして本迹の關係を明らかにし体用の調和を說き本佛の一月影萬水に浮ぶことを示せるものなり、若し釋迦の一代藏經中この法華經壽量品なかりせば、佛教は散漫たる多神教となり、或は基督教の如き一神教となり終はりしやも計り知る可からず、聖日蓮が壽量品は是れ一切經の眼目なりと讃歎せることの過言ならざるを知るべきなり

開目抄に曰く

「此壽量の佛の天月しばらく影を大小の器に浮給ふを。諸宗の學者等近くは自宗に迷い遠くは法華經の壽量品をしらずして。水中の月に實月の想をなし或は入て取らんと思ひ或は繩をつけてつなぎとゞめんとす」と

天台曰く

「撥ッ盆ヲ仰ヒ漢ヲ」と

五　佛教は調和的大宗教なり

佛教は世間出世間の道德を完全に統一調和せるものなり、基督教は宇宙の道德を說く時は國家道德と衝突し、又世の暗愚なる學者は偏狹なる道德思想に依り何等道德の根本義を教ゆることなく唯忠孝を說きて却りて道義の根本を傷けつゝあるものなり、必ずや仁義忠孝の迸ばしり出づる源泉其處に世間出世間を一貫せる道義の根底なからざる可からず大學には「故ニ君子ハ不ルヲ出テ家ヲ而成ニ教ヲ於國ニ孝ハ者以ニ所ニ事レ君也弟ハ者以ニ所ニ事レ長ニ也慈ハ者以ニ所ニ使ヒ衆ヲ也」と入ては孝、弟、慈、出ては忠、順、惠、是れ天の道たる至誠の大道念より湧出する

る所のものにして更に吾人は家族の一人たると共に國家の民たり、國家の民たると共に社界の一員にして、更に宇宙の人たり、されば佛陀は玆に四恩を教へて、家庭を中心としては父母の恩、社界を中心としては衆生の恩、國家を中心としては國王の恩、宇宙を中心としては三寶の恩を說き、之の四德並び行はれて悖らざるものの之れ眞の佛教にして釋迦の遺弟なりとす、儒家は道德の根本を天より來る至誠とし、佛教はあらゆる美德は三寶に歸依し奉る信仰の泉よりして流れ出づるものとなすなり、之の大信仰大信念は本佛世尊に對する至心に依りて始めて得らるゝものにして、大學は之の誠心の如何に尊重なるものなるかを教へて曰り「康浩ニ曰ッ如レ保ニ赤子ッ心ニ誠ニ求ンハ之ヲ雖ニ不ルト中ッ不ルズ遠キラ矣未ダ有ニ學ヲ養ヒ子ヲ而ノ後ニ嫁ス者ノ也」と、斯くの如くにして始めて家にありては孝子となり、國家に對しては忠臣となる、社界に對しては博愛の人となり、宇宙に於ては信仰の人となるを得可し

六　佛教は全意識の欲求を滿たす大宗教なり

七　佛教は超越的樂天主義の大宗教なり

少なくもこの二條項に就きて論議せざる可からざるも最早時間も經過したれば之は再會を期して大に語る所ある可し、終りに臨み、古今東西兩洋の文明を吸收し兩者を消化し融合せんとする今日の如きは、有史以來未だ曾て見ざる所にして、吾人大和民族の一大天職は之の幸多き日本國よりして今後永久に全世界に特種の文明の光を發揮し、更に之の完全無缺なる大宗教の下に世界の人類をして拜跪せしむ可き也　之れ吾人の天職たると共に聖日蓮の大理想なり　希くは諸君之の一大天職は、今や吾人の双肩にかゝれることを自覺せよ』

終

△僧侶の訓練を要す▽

訓練なき兵士は非常の場合に處して、用をなさゞるはいふ迄もなく、兵隊歐洲強國の兵士が器械的操練のみに傾き、精神的訓練に欠けて居る傾きがある、一朝事あるに當り、兵の空價なる顯はれてゐる、僧侶の訓練、各宗皆認めておるが、その實行は如何に、その法式は如何にと、吟味すればゼロである、學生養成これ、訓練の一なれども、吾人のいふ所の僧侶の訓練は、嘉希專修專門に驅れて甘んずる僧侶なして、自發せしめ向上せしむる、祭專門に現實させたい、現今の有樣にては、檀家の數、百万二百万を以て誇るも、何にもならない、信仰の扶植は目下の急務である、信仰の扶植により、實功あることは明々白々として爭ふの餘地ないこと信ずるのである

鎌倉時代の人情

文學士　川上多助君　講演

尚ぶべき武士の氣風も時頼の時代には墮落に傾きたる原因結果の理數は前段に述べたる通りである、此時に當り宗教革新の氣運が萠芽したることも、又前に述べて置たが、日蓮上人の如き儼然として大宗教を建設せられたる、この時勢を通觀すればその勃興は必然の結果であると思ふ、頼朝中心の思想が衰へ入道思想が流行するにつれて、勇烈節義の士風が減退した、畢竟するに時頼以後佛教の隆盛と共に、入道の風も愈よ盛になり、幕府草創の初より或は老耄により或は親愛せる者の死亡によりて、素懐を遂ぐる所謂入道の習慣は時頼以後甚しく且つ弊害之に伴ひ、入道せば專心出家の修行をなすべきに、彼等は入道の後も剛頂緇衣の身を以て、俗務に預るは敢て怪しまざる而已ならず、また佛に親み淫むの傾向は、政治武術の事を疎遠にし一代の風尚に殘害を與ふる事になるを以て、幕府は之を放任するを欲せず、仁治二年十一月十七日泰時が令を下して御家人等の、老耄に及ばず病なくして恣に出家するを禁じ、寛元二年新田太郎の大番役を勤めず且つ許可を待たずして、自由に出家したる罪によりて、その所領を沒收した、然れども禁に淨土に流行を極むるに至りては、此の風の增長はまた止むを得ざる事になり、弘長三年時頼の死するや、評定衆尾張前司時章、太宰權少貳景頼、引付衆丹後守頼景、隱岐守行氏以下剃に背きて、御家人の出家する者甄錄するに遑あらざりき、單り鎌倉のみに留まらず地方にもこの風に感染して出家する者多々あるを以て、令を出して之を禁じたが時頼より後は、記錄殘闕して審にする能はざれども入道の增加はこれを推察すべく、その結果として政治に武術に著しく沈滯を來した事も、爭ふべからざる事實である、寶治二年時頼が問注所奉行人の怠慢を叱するの文中に

「問注奉行人等雜務の稽古を闕き、酒宴放遊を事となし、訴人に面謁せず証文の理非を究められざるの間、評定座の時に臨み、下問の事等に預り答申する所頗る澁滯せしむ、然る輩の如き者に於ては召仕べからざるの由」（吾妻鏡）

時頼の時にありてすら有司の事を執る斯の如しとせば眞時高時の時代に於ける政治の頽廢は測り知るべからず、政連諫草第一に說く所は政術を興行せらるべき身にして、連日酒宴に耽り禪僧を招請するを以て事となし、政治の如きは預り聞かず毎月の定日たる評定五日、寄合三日奏事六日の間でも出席を缺ぎ　諸の奏事爲に閑くの止むなきに至りた（政連諫草大意）高時は鬪犬田樂に沈酒し、長崎高資專ら事を用ひ又謂ふを須ひず、遂に人心離畔して敗滅の悲劇を早めたのである

之を制度の上に見るに、その簡易にして適切なるは鎌倉幕府の特徴でありしが、北條氏の末世に至りては諸般の職務は多く世襲となり、凡庸の輩之を職ふし此に冗官を生じ、從來評定衆に於て政務を總攬し相議し來りしを、評定の席上種々形式の事多くなり、眞時の頃よりは新に寄合衆なるもの起りて、評定衆の或者等特に執權の亭に會して專ら政務を沙汰し、この間に實權なき、後の式評定衆を胚胎したのである、又建長元年に初めて置かれし引付衆は、漸く其數を增しが一度文永三年に止られて、同六年に復せられ五番十餘人を以てなりし以後、二十餘年に及んだが、眞時の執權になりて正應三年には、二番を減じ永久元年全く之を廢し同三年又これを復し、その番數は或は五六或は七八と、數年に亘りて暫くも定まらない、而して時宗の初に越訴奉行を置て問注奉行の私曲緩怠を防ぎ、眞時新に京下奉行を創めて、京都官人の訴訟をして澁滯せざらしめた（武家名目抄）

政令の屢々出るを以て綱紀の弛むを窮ふに足るべく、斯の如く政治の衰頽すると共に、武藝を怠り文弱の弊に流れた、建長五年時頼之を嘆き御所に在の日、弓馬の藝は追て試みるべく、まづ相撲を催さんとせるに、或は逐電し或は固辭して出ない、止むなく遁避する者は永く出仕を停むといふにより、僅に十餘輩着衣のまゝ、六番の勝負を行ふた、武技の中に珍重された小

笠原縣も、人これを翫ばざるために、その道廢れてこれが堪能の者を失ひ、獨り太郎時宗の名をなさしめた（東鑑）、後弘安七年に武道の忽せにすべからざるを令せしも、その功なかりき。夫の賤しき諺に關東、簡國の勢を以て、日本國の勢に對ひ、鎌倉中の勢を以て八箇國の勢に對ふと（太平記）謂るは、遂に一の空名となり終りて、東國の全軍を發してすら、嚴爾たる千劍破の城さへ陷落されない面已か、新田義貞の上野に起りて、鎌倉に責め入るに當り、破竹の勢を以て進み、向ふ所敵なく容易に幕府を顚覆させたは、畢竟鎌倉武士が士風の墮落に基因するものと、斷定するのである

武藝に代りて武士の間に喜ばれしものは、茶連歌田樂等である。茶に已に榮西の賴家に献じたことがあるといへど、未だ大に行はれずして、只僧侶の間に愛好しつゝありしが、この頃に至ては武士も之を嗜み況く行はるゝように見へる、太平記に東軍千劍破城を責むる條に、「大將の下知に從ひて、軍勢戰を止めければ、慰む方やなかりけん、或は碁双六を打ちて日をすごし、或は百服茶褒貶の歌台なんどを翫びて、夜を明す」とあり、虎關の異制庭訓往來には、茶の名所として駿河の清見、武藏の河越をあげ、「皆是れ天下指して言ふ所なり」と、謂へるに徵しても、東國に茶の流行が盛なりしことが知れるのである、さらに同書に「茶香の翫びは、只當世の樣は珍体を以て風情となし、淳朴を以て比興の儀となす」とあるより推測すれば、武士の天性ともいふべき、淳朴を愛するの風は失せて、只管奇に走ることになりた、又同書に「連歌は漢の連句の如く、近代之を翫ぶ都鄙貴賤の藝なりと」あれば、當時遍く行はれたる娯樂であるが、その娯樂に訓育の伴ふといふ、清興の欠けたることは、左の二條河原の落書で解る、「京鎌倉をこきまぜて、一座そろはぬえせ歌」、太平記に東軍千劍破城を攻る條に、「唯取卷て食攻にせよと下知して、軍を止られければ、徒然に皆塔へかれて、花下の連歌師共を呼び下し、一萬句の連歌をぞ始めたりける」、とあるによりて其の東國に於て盛なりしことが、判明するである、されど茶といひ連歌といひ、

遂に清興に止まる能はずして、同人相會するや忽ち一種の賭博場裡と變ずるを以て、建武式目には、「この外また茶の寄合と號し、或は連歌會と稱し、莫大の賭に及ぶ、その費勝て計へがたきものかと、これを戒めた、また田樂は高時尤も之を好み多く法師を養ひたが、下これに倣ふて甚しく一時は隆盛を極めたのである、當時京都に行はるゝ風として、之に綾羅錦繡の服を興ふるを常とせしかば、東國もこれが爲に奢侈華美の流弊を、受くるは双免れざる所である、口さがなき京童が、「犬田樂は關東の亡ぶる物といひながら、田樂は尙はやるなりと」、囃もその理なきにあらざる所、太平記にこれを描きて詳らかである、「その比洛中に田樂を弄ぶ事昌にして、貴賤擧りて之に着せり、相模入道この事を聞及び、新座本座の田樂を呼下して日夜朝暮に弄ぶ事、他事なし入興の餘に、宗徒の太名達に田樂の法師を一人づゝ預けて、裝束を飾らせける間、是は誰がし殿の田樂なんどいひて、金銀珠玉を選しくし綾羅錦繡を飾れり、宴に臨みて一曲を奏すれば、相模入道を始めとして、一族太名我れ劣らじと、直垂大口を解きて拋げ出す、之を集めて積むに宛も山の如し、その弊幾千萬といふ數を知らずと」、又同書廿七南北朝の時代に、猶田樂の流行を說きて、「關東亡びんとて、高時禪門好み翫びし者先代一流斷滅しぬ、よからぬ事なりとぞ申しけると」、あるによれば、或は此時關東に於て一流の田樂のありし樣思はる

凡そ經濟の發達と共に、生活狀態の上進は避く能はざるは、自然の理數であるが、鎌倉の繁榮に伴ふて市民漸く奢侈に赴く風あり、建長五年鎌倉居住民の過差を禁ずる、令の如きは此の間の消息を洩らして居る（東鑑）一般の氣運に促されて、武士も到底舊來の素朴に甘んずる事が出來なくなつた、正元二年院の落書（史籍集覽）にいはく、「南都に專修あり、大乘院馬あり、學生に宗源俊範あり、武家に過差あり、聖運已にすゑにあり、

（當時の京都紳縉の日記を見るに、兩六波羅を以て武家といふが如し、落書の武家また之と同じく、六波羅を中心とする關東武士を意味するならん）

仁治二年には酒宴の間、風流の菓子を用ひ、衝重外居に書圖を施すを禁じた(鑑東)、この類の禁令は年と共に益々多く出した、武家時代法制の慣習として、豫じめ整然たる制度を設けず、必要に臨んで法令を出すを以て、此等の禁令は直にその弊の存在を示すものであれば、今東鑑式目新編追加新御式目等によりて、鎌倉末期に於ける武士の生活を窺ふ事が得らるゝのである、その他食物または器具衣類等すべて、華美珍奇を好み、屢々戒飾を加ふるための禁令、その効なく、一道の暗流は性來して、幕府草創の初より憂となせる、博奕の流行は都鄙上下を通じて、甚しくなり、殊に常陸下總は陸奥と共に、その最たるものである、惡黨四方に跋扈して暫らくも穩ならず、嘉祿二年四月には、白河關に博奕不善の族、公曉と稱して起り一時幕府を驚かしめ、寶治二年には、常陸・忍・無蜂起して之を訴ふる者多く、建長八年には、奥州大道夜討強盜の聞あり、武藏野の如きは、當時剣盜を以て有名であつた而して博奕往々田地を賭して、爭ふ者あるより嘉祿二年には之を禁じたるも更に功なく、仁治二年には更に嚴重に令し、若し之を犯せば、其所を追放することにしたが、博奕の爲に產を失ふ者、浪人となりて鎌倉に聚まり來たり、市中の安寧は常に此等の輩によりて擾亂せらるゝゆゑ、幕府は保檢斷奉行を督勵して、此輩を駈りて田舍に還し、農耕に就かしめたが、拂へば又隨がひて來り、保々奉行の嚴重なる監督の下に、鎌倉は決して安全ならざりしは、仁治元年の保々奉行存知すべき條々の中に「盜人、旅人、辻捕惡黨等の警固すべきを」いふに徵して明かである、盜賊は京都と同じく、群をなして横行し(東鑑二十、)(仁治十二)、弘長三年地藏堂に捕へし群盜は、一網十餘人に及んだ、夫の幕府の常に禁じて止ざりし、勾引人、人賣も又鎌倉中に此を業とするもの多くあつた(式目新編追加)、

さらに幕府の中心たる御家人に就て、考ふるに恒產なければ恒心なしとは、千古の名言にして、幕府も豫じめ此を慮り、御家人所領の維持に留意し、以て士氣の弛廢を防がんとした、貞永式目に於て、相傳の私領は

賣買するも、指て問ざるも、或は勳功に依り或は勤勞に依りて特別の恩賞として、賜はりし所領は悉に賣買するを禁じ、若し之に背らて沽却せば、賣人買人共に罪科を免れざるとを規定した(式目第四八條)、然れども後間もなく、御恩の所領を以て、負物の質券に入るの風ありしかば、延應二年には泰時この弊風を救治せんとした、「右沙汰出來の時、半分以上に過て辨を致す者、日數を差して辨償せしめ、彼の券契を糺し返さるべし、半分に足らざる者、所領を他人に宛ふべし」(式目追加)、然して之れと殆んど同時に、式目に於て許したる私領賣買を制止し、自今以後凡下の輩、沽却することを止め、若し之に違へば近例に任せて、その地を公收する事とした(式目追加)、之等兩條を合せ見れば、幕府が御家人所領の保護の精神のある所を知られてある、されど泰時の時代にありてすら、動もすれば武士の所領が動搖せんとする傾向あるに、世降りて鎌倉の繁昌と共に市民の漸く奢侈に流るるに當り、この傾向彌々增加し、文永四年には遂に御恩私領を問はず、御家人にありては、一切所領を沽却し或は質入するを禁じた(式目追加)、幕府はしかく保護のために盡瘁するも、滔々たる一代の流俗は、到底一令の能く支ふる所にあらざるのである、爾來また屢々禁令を出したが、その弊は底止するなく、恒產を失ふと共に恒心を保護能はず、訴訟日に盛く、財用身に足らなくなり、上下の禮は失せて幕府草創の際に於ける、凜烈の氣、悲壯の慨を求むべくもなき落日暗澹の、滅亡を現出するの己を得ざることになつた、平政連謙草に、當時の武士の弱黙を扶り盡して餘蘊ない

(往昔貴賤たり并に大名の人、所領を沽却する事これなし、諸國御家人適々賣買すれば必ず沒收し了んぬ、近年然るべきの人々、猶過差にして法に違ひ、家用足らず、或は領所を賣り或は料所に置く、料所と號るもの、所帶を家人に給せず、預じめ富有の輩に與へて、錢貨等を充取するの儀なり、郎從顯勝の分惟少なく、郎戚扶持の至り相鉄く、大名の號ありて猛勢の實なく、況んや公事に擯課するの時、所領を

沽ざるの人これ少なし、是を以て公家の正税を濟しかたく、武家の所課を懈る、下知に背く數月に渉る、上裁を犯して多年を歴ぬ、倉廩實ならず、禮節辨へなきの至りなり、臨時の公役不日の御要儀、俄に所帯を賣り難し、元蓄ふる所なきによる、仍て切々嚴命ありと雖ども、度々固辭に及ぶ、上のため下のため痛ざるべからず、曾に過差に由の積所のみにあらず、また分限の減ずる所に在のみ、父祖一身の跡を以て、子孫數輩に讓るの處、官仕の体は父祖の在様の如く公事の足、更に子孫に依て減儀なし、諸御家人所領分限の事、昔過半千町に劣らざるもの、今は千町分限十餘人に過ぎざるか、十分の九は四五十町か、その以下は二三十町十二十町ばかりなり、十町内またこれなし、此輩番役に就き參住せしむ、新誂に依て召置れらる、渡世の法合期叶はず、儉約の實なき者は、堪がたきの儀たり、次に足なき及び凡人に於ては、狂惑を以て宗となし、姦謀を以て先となす、衣食足らず廉耻顧みるなきの故なり、事々過差を止め、漸々財産を積ましむる事更に他事にあらず、云々(云云)

敢進諫草は實に憂國の議論である、人若し三善清行の意見封事に依て、王朝の不振を知とせば、此に依て又鎌倉幕府顚覆の原因を察する事が出來る、さはいへ、北條氏積年修養の結果は、未だ全く滅びずその壯烈なる最後は、他の足利氏等の武家と同一視する能はず、赤橋盛時安東聖秀金澤貞將本間山城左衛門等の忠烈といひ、高時の東勝寺に死するや、殉死する者數百人の多數に及びし如きは、北條氏の末路を飾るに足るべき光彩である、已上の說話は法令等を骨子として、調査したるものなれば、比較的正確である事と信じます。

(完結)

國力護持論(續)

田中智學君 講演

法華經の神力品の中に、十種の神力を現ずることを說

いてある中に、十方世間の衆生が、娑婆世界に向つて各々皆南無釋迦牟尼佛と唱へたとある、是れは實に佛教究極の深遠なる意義を示して居るので、即ち法華經已前の佛教に於て、西方極樂の阿彌陀とか、東方淨瑠璃世界の藥師とか、此の娑婆已外に佛を說き淨土を設いたのは、現實を破壞して假りに遠い處に理想を示したのである、然るに今又法華經に此の娑婆世界に向つて南無せしむるは、更に其の理想境にばかり凝りかたまつて居たる考へを打破つて、更に本家本元の現實界の眞實境を示したのである、此の還元歸一の大教義があつてこそ初めて、佛教に眞の生命が有るのである、若しも之れが無くて、理想境にばかり夢中になつて、西方極樂の結搆な事や莊嚴の美しい事を陳々と列て見たところが、ツマリ理想と現實との綱が切れて了ふから架空になる、シテ見ると全然夢の中で牡丹餅を御馳走になつた樣な話して、ツマラヌ事になつてしまふ、ソコデ現實界を中心として娑婆即寂光の眞實の淨土を示した、現實といふことは目前の事實であるから、迷想誤想ではならぬ、

此の現實界を正確と娑婆即寂光の淨土にするには、世界の思想道德等の攪亂せるものを悉く統一せなければならぬ、統一と云ふた所で、獨逸の黃禍說の如なものでは無い、元來一切の教法といふものは、皆統一を豫想して居る、耶蘇教の神でも統一の爲めに說かれ、佛教の中でも、大小乘經に明すところの、業感緣起賴耶緣起法界緣起等皆統一の思想より出でたるものであるが、區々たる統一に陷いつてしまふて、これよりも更に大なる統一法たる一貫の大道に入るべきを忘れてしまふたのである、故に上下の明分を辨へざる如き分烈狀態になつて居る譯だ、丁度國家の如きもので、各々個人より家族、それより團体といふ樣に、如何に民族が多からうが、團体が澤山あらうが、各自の天職を守るはよいが、其の上に大なる統一權を認めて居なければならぬ、若しも國家に統一が無ければ國家は擾亂と滅亡とを免れない、それであるから學者でも軍人でも商人でも其他何如な地位職分の人でも、皆悉く天皇

陛下の御威德仁慈の中に這入つて活動せなければならぬ、此の如に、此の現實の娑婆を寂光の極樂にするには、大なる統一權の下に悉く統一するより外はない、釋尊が、事實の境界たる此の娑婆を破壞して、理想境を示されたのは、現實界に於ける吾人の執着を破らんが爲めである、即ち此の現實世界に於て正法を誘誘すれば地獄へ行き、佛の敎へを能く信ずれば極樂へ行くと說いた、極樂の狀態なぞは非常に甘く說いてある、然し地獄の方になると、最も怖る可き處といふ丈て細かには說かない、若し此の地獄の有樣を詳しく說けば、衆生は之を聞いた丈て血ヘドを吐いて死ぬだらうと言はれた、最も是等の現實界已外の說は、皆是れ佛の善巧方便といふものである、眞實の事は、下手に說いても宜いが、方便は餘程巧く說かぬといかぬ、ソレだから善巧といふのてある、

法華經は、是等の方便は用ゐない、現實である、有の儘てある、故に正直捨方便といふ、此の吾人凡夫の住んて居る世界が、寂光の淨土になるといふ、凡夫が佛の仕事を爲せば其の儘佛に成るといふのてある、一々に皆現實的てある、釋尊は「我レ常ニ此ノ娑婆世界ニ在リ」と說いて此の現實の世界を本土とせられた、是れ實に佛敎の一新紀元てある、是れは彼の本願寺あたりの西方主義とは、全然反對てある、

法華經は此の現實界を中心として統一を主張するのてある、此の統一が人間世界に行ふことが出來ないのは、其罪は主として慾にある、人は正當防衛の名の下に慾をかく、嘘をつく、諸有る罪惡を行ふ、是れが元品の無明だ、いくら道德だ倫理だと云ふた所で、此の原因を除かなければ何んにもならぬ、ソレダから日蓮上人は「地獄の道を塞ぐ」と言ふた、愚圖々々言ふて居るよりも、道を塞いて了ふた方が早い、是れ上人の根本療法である、此の根本療法として、精神の統一、次に思想の統一を圖る、一体人間が事に處して種々に迷ふたり愚圖々々したりするのは、其の根本の落居地が明了して居ないからてある、彼の重盛なぞが忠ならんと欲すれば孝ならず孝ならんと欲すれば忠ならずと去就

進退に迷つて居るが、隨分困つた話してある、日蓮上人は、開目鈔に「父、王に叛く、父を捨てゝ王に參る孝の至りなり」と仰せられてあつて、裁然と忠孝歸一の大道を示してある、全体一家の親とか主人とかいふ者を鼓吹して其の以上の本源を確然と說かないから一朝事ある時に迷ふてしまふのてある、日蓮上人は「世を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す」と仰せられて、忠孝の本質を理義の上から定められた、敎育勅語は、皇祖皇宗の遺訓を顯はされたものてあるが、日蓮上人の主義に外ならんと思ふ、

思想道德の上に根本的統一を得ない以上は、世界に戰爭は止まない、いくら博愛を說いて見たところが、決して其れを實現し得られるものてない、露國が平和會議の先達になつて騷いて見ても、イザとなれば自分から先きへ戰爭の火蓋を切る、英國が印度に對して、やつて居ることても、博愛を實行して居るとは言へない、一視同仁なぞとは勿論更言へない、ソコデ終末には正當防衛を口實にして、有ゆる惡事をやることになるのてある、

世界統一といふことは必然の道理てある、此の必然の道理を開却して、小さく對峙するから、其處に不和といふものが出來る、世界の統一を圖らんとするならば、何人も異議を言ふことの出來ない最上の標準に依て統一せなければならぬ、即ち法華經の如き深遠高大なる敎義を以てせなければならぬ、日蓮上人が佛勅に依て此の世に出現せられたのは、此の命我にありとの本化上行の自覺を以て、三大秘法を建立し、此國本來の目的を明かにしては「一閻浮提第一の本尊此國に建つべし」と言ひ、此の日本國の眞價を道破しては、「我日本國は一閻浮提の內月氏漢土に勝れ八萬の國にも超へたる國ぞかし」と宣言せられ　統一的靈國たることを明かにしたのてある、神武天皇の御詔勅に「上則答二乾靈一授レ國之德一下則弘二皇孫養レ正之心一然後兼二六合一以開レ都掩二八紘一以爲レ宇」とあるは、是れ國祖に答へ、國の精華を發揮したものて、國を授け國を受くるの時に於て、道義的世界統一の約束が明か

にされてあるのである、

印度の古話には、轉輪聖王は世界を一統するといふことがある、轉輪聖王の出現は實に我が天孫降臨の國てなければならぬ、此の考へからして予は　皇室の御紋章は菊花では無い、轉輪聖王の輪寶であると云ふことを勅語玄義の中に道ふて置いた、其の後姉崎博士が印度を廻つて歸られたから聞いたところが、印度には彼の樣な紋が澤山あると言ふて居つた、僕のは向ふ見ずに斷言したのである、釋尊の王族を日種といふのは、我國に於て天照大神を先祖とするのと同じてある又神武天皇が、日の神に向つて長髓彦を征伐したといふのも大に意味のあることだ、龍樹天親なぞが、我國を見たならば何といふてあろう、斯る次第からして我大日本帝國をば世界統一の國と言はねばなりません、否日本國は世界統一の爲めに存在すると言ふべきてある、「養正」と詔りし給ひたるは、養は護持の意味てある、道義を護持する、道義の基本は統一的大法てある、そして統一的大法とは即ち法華經てある、故に養正は法華經護持てある、

▽無　意　味△

近頃、妥協調和といふ語を、上乘として喋々口にする人があるが、佛教にいふ所の、相對絶對の關係をわきまへらんでは、妥協も無意識になり、調和も混同になり了はる、全體、宗教家お宗教の本領は意識して居らないと、自己の職責を完ふすることお出來ない、己を信じて人を信ぜしむる、其處に感化の妙がある、所が宗教家の多くは、宗教意識の力お足りない、ゆにてりあん、統一などを唱道する人も、相對絶對の關係を無視するおら、ゆにてりあん統一の靈妙を發揮することお不可能になる、混同的統一主義の類屬では、ダメである、然らば若ほと聞くであろう、僕の統一主義は顯本的である、顯本的統一主義は混同的にあらずして、傳聲の教義を中心として、すべて是の經王に統一せしむるのである、

大學林同窓會六月例會に於て講演されたるものを筆記したるものなり

布教術の一要素

井村日咸講演

筆記者　中原通藍

社會に立つて布教するといふとは極めて重要なとてあります、諸君が此處に立ち演說を練習されるのも一は此目的を有つてやらるゝとと思ひます、て諸君が將來

實際に布教せらるゝには必ず其要素に就て考へなければならない、學問をするも、演說說教をするも其要素には相違ないが唯好く饒舌さへすればそれて事は濟むと云ふ如き心掛けてやつたならば決して多くの人を感化し導くとは出來ない又そんな演說說教では聽く人も信ずる道理もなく、滿足する苦もない、故に須く人に教へ之を導くには其根底がなくてはならぬ、然らば其根本となるべきものは何てあるかといふに法師品に說かれてある所の衣坐室の三軌、之れが即ち吾人布教者の要素となるべきものてある、

法師品云　若善男子善女人ありて如來の滅后に四衆の爲に是の法華經を說かんと欲せば云何んが說くべき是の善男子善女人如來の室に入り如來の衣を着如來の坐に座し爾して乃し四衆の爲に廣く斯の經を說くべし如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れ也如來の衣とは柔和忍辱の心是也如來の座とは一切法空是れ也是の中に安住して然して后に不懈怠の心を以て爲に諸の菩薩及び四衆の爲に廣く是の法華經を說くべし

此三軌に依て布教したならば必ず成功するのてある即ち常に大慈悲心を有ち柔和忍辱の心を抱き如來の眞理に住して法を說くならば決して成功しないと云ふとはない此三軌の中ても如來室即ち大慈悲心と云ふとは就て御話を致します全体吾々が世人を化導すると云ふとは如何なるとてあるか何の爲にするのてあるかと云ふに救濟と云ふ必要があつて起つたので即ち大慈悲心より出たものてある苦に惱める衆生迷に沈める輩を見てあ入可憐てある之を救はねばならぬと云ふ心より出てなければならぬ、若し人は如何なるとも我不關焉勝手にするがよい、と云ふ樣な體て迷へるものを見、苦しめる者を見ても其儘打ち捨て置くならば彼等は彌々暗黑中の人となり其進退より脫する機なく又益々苦患を重ねるてあらう然らば之等の者をして光明あり樂みある善き方に導き教へて行くのが所謂布教家の責任てある若し此心が欠けて居つたならば其人の云ふとなすとは何の効果もない、如何に喋々たる辨を逞ふすると

もそれは單に饒舌家と云ふに過ぎずして實際上認ひべき點は存しない之に反して其根底に慈悲と云ふことを忘るゝなく是非救はねばならぬ斯樣爲ねばならないと云ふ心を以て人を導いたならば多大なる感動を與へ必ず効果があるのである故に仝しとを言ふにしても唯役目だからと云つてやるのと誠心誠意より溢れて爲すとは非常に差異がある若し布敎する者が自分は僧侶だから饒舌るのだと云ふやうな心得で演說說敎をするならば人に對して何等の感化もなく影響も及ぼさないとは勿論、ある然し其根本に此慈悲と云ふ誠心ありて布敎すれば必ず感應があるに相違ないされば布敎をなすに就ては先づ慈悲と云ふことが尤も必要である必ず之れより發作せねばならない換言すれば道念の發作である即ち是非救濟せねばならぬと云ふ心から出なければならない佛陀も宗祖も皆之を離れて法を弘められたのではない、迷より轉じて又迷に陷りたる衆生を見て何てか憐愍の心を生せずに居られやうか佛は大慈悲の發さ御心より之等衆生の爲に偏く說法されたのであります

方便品云　我れ佛眼を以て觀して六道の衆生を見るに貧窮にして福慧なし生死の險道に入て相續して苦斷せず深く五欲に着すると犁牛の尾を愛するが如し乃至深く諸の邪見に入て苦を以て苦を捨てんと欲す是の衆生の爲の故に而も大悲心を起しき

之即ち佛が衆生を見て憐み玉ふた御言葉である衆生は迷見の故に此苦縛を脫するとが出來ない苦を免んとして金持になりたがる其貪着の心は悉く苦となるのであるが而も衆生は敢て苦を求むるとをして居る故に

壽量品云　此子愍ひべし毒の爲に中られて心皆顚倒せり、又云　我れ諸の衆生を見れば苦海に沒在せり佛陀は之を救はねばならぬ覺醒させねばならぬと云ふ大慈悲心を起し衆生を敎へ導かれたのであります佛は常に此御心より外には何の御考へもない故に

壽量品云　每に自ら是の念をなす何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就するとを得せしめんと

かく說かれてある之れ即ち苦海に沒在せる衆生をして

如何かして救つてやりたいものであると云ふ大慈悲心より出てたのて如是文は法華經全典通じて到る所に說かれてある要するに佛陀は迷妄の衆生を見て打捨てゝ置かれぬのて此世に出現して種々に法を說かれたのてある吾人が布敎するにも常に此心地に住してやらねばならないと思ふのてあります此は佛に就て申しました

が宗祖上人も仝じく此とを申されてあります

諫曉八幡抄云（內廿七）

今の三大師の敎化に隨ひて日本國の一切衆生無間地獄に墮る者大地微塵より多し是を見ながら日蓮申さずば俱に墮地獄の者となつて十方の阿鼻獄を經廻るべし爭てか予は喚らざるべき涅槃經云一切衆生異の苦を受るは悉く是れ如來一人の苦也と日蓮云く一切衆生の一切の苦を受くるは悉く之れ日蓮一人の苦と申すべし（取意）

又云

只南無法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れんとはげむ也此れ即ち母が赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲也

開目抄云（內二一）

日蓮は法華經の智解は天台傳敎には千分が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたるとは恐れをも懷きぬべし

報恩抄云（內七）

日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流布ずべし日本國の一切衆生の盲目を開ける功德あり無間地獄の道をふさぎぬ此功德は傳敎天台にも超へ龍樹迦葉にもすぐれたり

以上の御文は皆上人の慈悲が溢れて現はれたので、八幡抄にある通り地獄に墮するものを見て如何てか救はざるべき如何でか之を眺めて居られやう例へば此に一人の幼兒があつて將に井中に陷らんとするを見たならば誰人と雖ども之を助けないものはあるまい日蓮上人は日本國一切衆生が惡道に墮ちかゝつて居るのを見て之れ我れの苦と云はれたのは是非共此世人を救はねばならない如何かして善道に導きたいと云ふ根本の慈悲

心からかく叫ばれたのである布教者として若し此心がなかつたならば恰も蓄音器に於けるが如くである、全じ義太夫を聽くにしても蓄音器で聽くのと實際に聽くのとは非常に感動が差異ふ一寸考ふれば全じ道理であるべきであるのに其異ふと云ふとは何故であるかと云ふに假令云ふて居るとは全じであるが蓄音器は只音ばかりでそれに心がない從て感動が薄い、かくの如く布教上に於ても矢張其根本要素が大に影響を及ぼすのである此とは非常に重要なとであると思ふ故に前にも申した通り是非救はねばならないと云ふ必要を感じて始めて其一言一行が活けるものとなり社會に立て活動するに當て非常なる効果を來すのである三氣の中でも此慈悲と云ふとが尤も大切の事と存じました故茲にお話を致した次第でありますが實は他の二も話す筈でありましたが今日は略して此第一の要素となるべき慈悲に就て諸君が將來布教さるゝ心得として述べた次第であります(完)

啾々錄

△志念の力堅固とは、純信仰の活力を示したるものて不染世間法とは、濁世に超越せる義人の本領を示したるものである、近代清濁併呑は流行語になり、これを實行するが達人の樣に思ふは、大なる誤解である清濁併て救濟同化せしむるが、達人の達人たる面目である、

△門鄙に「葷酒不許入山門」の標石を立て、酒量大觀と澄ましこひは、禪僧の最も得意とする所、客ありこれを問へば、表門は然り裏門は否らずと、これ表裏反復常なき駒鮮にして、また墮落の醜狀を表現せる好適例にあらずや、

△當世の狀態もまた爾り、佞邪姦惡の行爲を何んともの思はぬ、正義よりは手段を尚び、不正によりて不義の榮華に誇るも、人これを怪まず又之に制裁を加へず黄金撒布に魅られて、良心の光明を失ふ者の多々あるは、浩歎に堪へざるなり、

△八方美人主義を以て、人生の要訣虎の巻となし、お體裁その塗濁しを、智者の上乘と心得るは現代社會の通弊なり、求めて人の惡事醜行を許くの必要もなけれども、全體惡事醜行をなす者は、名譽も品格も有する資格なき者なれば、これを膺懲するは當然、況んや虚飾お體裁に流がるゝ、現代に於ては大に折伏せざるべからず、我等宗教家はこの折伏に調誡を意味し悔悟の實を擧げざるべからず、

△虚飾お體裁は、國家の存在、國民の生氣、または各自の任務を、衰退せしむるものである、制度の完備は、民の倚りて安堵する形式の道具なるも、良心理想確信の堅固ならざらしめば、民の蒙むる苦痛は想像するに餘りあらん、賄賂請托は國法の嚴禁せるにも拘らず、賄賂請托は公然の秘密として受授せられ、これによりて政治に計られ、これによりて獄窓に呻吟する者あるは、國家の不祥これより大なるはなし、

△上に貪戾の行あれば下これに習ひ、上に淫縱の行あれば下また之に習ふ、その發動の機斯の如し、經國の士、國家の興隆國民の强健を望まば、須からく自己を標榜として、天下に活動せよ、

△社會には光明と暗黑の二面あり、暗黑を斥けて光明を發揮するは、人生に於ける奮鬪活動の大本たり、正義の權威、信仰の活力は實にこゝにあり、吾人の德本また此にあり、正義信仰を求めずして、處世の行路に立つ、失敗墮落する素よりその所なり、

△國防の要は信仰、しかも正義に伴ふ健全なる信仰の活力にありと、喝破せる帝國に達識の軍人あるは、生氣の衰退を疑はるゝ現代の民心に對する、興奮劑なり、我等國民の精神は、至誠一貫勇健事に當る生氣あるものなり、憂ふべき柔弱の風習を起せるは、時代の病なれば速に救治すべし、

△戊申の詔書は畏れ多くも立國の大精神が古今に充實せることを、示し給ひて我等國民の嚮ふ所を教へ給へる大御心と奉し奉る、有司力を盡して詔書の實現に勤勞するが、民心刷新の成果は人道の德本を植ゆるにあり、正義の種子を蒔き、精進の力により

て耕かし、表裏ある言行をなさず、己れ天下の耳目となり、一日も早く理想の樂土を實現せんことを望む、これ、志念力堅固の効す所である、これ世間の法に染らず蓮華の水中に在が如き清廉潔白なる行をなす人の功を收むる所である、人中の寶とは、正義を守り信仰の活力を、實現する人に賦與せられたる最高の寶冠であらう、

（簑堂）

正誤

「統一」第百七十二號所載「日蓮上人の警句」と題する予の講話中「乙御前を池上の娘とせしは記臆の錯誤に付左の典據を擧げて之を訂正す（本多日生）

本化佛祖統記

妙常日妙比丘尼は駿州富士郡重須の邑主橘樹氏伊豫守定時の妻也二男一女を生む長は眞間山主日頂尊者次は寂仙房日証にして次は女子乙御前也時是れ戰國にして家衰へ運窮まりて定時戰死す妻三子を携へて潛に鎌倉に往き影を匿くすこと年あり女性學に精しく頗ふる文字あり又二寶を崇めて毎に法華を持す時に下總州若宮の邑主富木氏五郎胤繼妻を喪ふて久しその爲人を聞いて招て後妻に充つ（中略）文永中高祖佐に謫せらる妻歩を企てゝ問訊す千里の海陸唯一子を携ふ志操禮節大丈夫の如し高祖見て之を感歎す日証幸に重須の舊地を得て父定時の塚を修め第を結びて終身の喪を期す又母日妙を迎へ孝行誠を竭くす乙御前亦母を遂ふて至り比丘尼となる名を妙國と呼ふ母に相見て大に喜ぶ

日健鈔

此日妙と申は鎌倉にて丹砂を燒く女人也、男に離れて一人の子を持ちたるが、此子を幼少の時預け置かうずる樣なる親類無つる程に我れと負ふて文永九年佐渡へ參り玉ふ其志を感し玉ひて遊し被下也其時日妙と云ふ名をも被下し也

片瀨たより

第一信

青村生

編輯主任笹川君貴下　天晴會夏期講習會は、豫期の如く七月廿一日より鎌倉片瀨の龍口寺に開催せられ候

小生は幹部の一人として、準備の爲め兩三日前來るべかりしが、生憎十九日に先師の謝恩會出席の爲め下總生實へ參り候て、二十日午後一時に漸く會場へ着いたし候、されど山田幹事十九日午前中に着せられ候て、龍口寺執事片野玄貞及び塩崎玄仁兩君の助力を得て、準備萬端ととゝ行屆き居り、小生の着せし時は海水浴特約談判の爲め山田幹事は濱邊へ走せ行けりとの事にて候ひき、

笹川君貴下　『天皷』主筆柴田其年君の、舊住地大磯の塩化を濟ませして十八日着到せられしは別事として、會員の先登第一は福岡中學の半田敏治君梶原源太は東洋大學の戸田文雄君にて何れも十九日午前中に、小生の着到と同時に丹後の野村智秀大村觀壽の兩君、續いて備中庭瀨の本化法王會高塚源一君、及び岡山日蓮研究會の松崎事政中川荒の兩君等にて、夕刻迄に到着の會員三十餘人と注せられ候、關田幹事松本幹事は午后五時頃相前後して來り、柴田幹事亦黄昏大汗を拭ひつゝ後れ馳せに驅けつけ候、斯くて晩食後會員諸君は旅の勞れに就褥の人となりければ、我等幹事は離れの一室に受持の役割其他何くれ明日の手配をなし、三更漸く肱を枕に黑昏鄕里の人となり候、明くれば

▲▲▲廿一日（水曜）快晴　午前中は東京及近傍會員の到着待受と、未整の準備とに空しく消へ、正午迄に會員八十餘名と、雜誌記者數名を數へ、諸種の掲示は遺りなく掲げられたり、斯くて午後一時左の順序に依りて開會式は擧げられ候

開會式次——一、第一鳴鐘——一同着席　一、開會の辭——松本幹事（演說）　一、報告——柴田幹事

一、祝文——雜誌記者總代天皷主筆柴田頴秀君——會員總代繁宮久遠君——岡山日蓮研究會代表中川荒君——庭瀨本化法王會代表高塚源一君　一、祝電披露——關田幹事　一、祝詞——天晴會代表西谷龍顯君（演說）以上

右にて式を畢り、午後二時半、一同祖師堂前の石階と正門脇の大樹の下の兩處に於て、日宗社同人佐藤茂八氏の寫眞撮影あり、午後三時、大僧正本多日生師『日蓮上人の特長』の題下に登壇、約二時間の廣長舌を振はれ候、想ふに日蓮上人に特長なしとは、過去及び現代の學者諸者ゝ稱すべき人士の齊しく稱和する所、本多講師此誤解を氷釋すべく、堂々として上人の特長を提唱し來るもの數項、痛絶快絶言はん方なく、是が若し演說會ならざしかゞ拍手の音は遥かに江の島の避暑

客をも驚かすべからんと思はれ候、

笹川君貴下　本講習會の講演式次は、幹事會の決議もて一切ハイカラ式の樂器などを廢止し、極めて敬虔の態度を保維すべく、左の順序を用ひ申候、勿論床の間には聖祖水鏡の肖像を安んじ奉り、講演の始終に香を焚き帳を開閉し上る等、清楚にして恭敬の儀式を苟くもせざることは申す迄も無之候、

講演式次＝一、第一鳴鐘＝一同着席　一、司會者祖書捧讀＝一同合掌敬禮、首題唱和　一、講演開始＝一、講演終了＝司會者祖書捧讀＝一同合掌敬禮、首題唱和

此日司會者は關田幹事にて、講演の前後に本尊鈔の天晴地明の聖文と、開目鈔の三大誓願の一節とを朗讀せられ、會員一同が聲張り揚げて緩く豊かに和せる題目の七字は、何となく四海晏妙の音響を傳ふる心地せられ候、此態度此音響は又なくいみじく、十日を通じて變りなく實行せられ候、

廿二日（木曜）　快晴　清水龍山師の病氣缺席は止むを得ずとするも、高島講師の暑氣にあてられて下痢甚しく、本日缺席の飛報來りしには、會員の落膽此上なく、驚て午前七時開會、司會者山田幹事祖書拜讀一同題目唱和、本多講師昨日の續講二時間、十時小憩、更に十時十分より十一時二十分迄、講演『日蓮上人の特長』數段に亘りて畧ぼ講了せられ候、げに教界の雄將、論議明晰理路條然、聽者皆悅服せるを見受け申候、山田司會閉會を宣して祖書を拜讀し、一同題目唱和

笹川君貴下　此夜七時より交名紹介茶話會を催し候五錢の會費にて片瀬饅頭一袋宛を出席會員九十餘名に配布し、山田司會の點呼にて、呼ばれたる當人は立て左の數項を陳辯する仕掛けに候、

一、原籍地及現住所一、既歷の學校及び現時の學校

一、年齡一、職業一、宗籍

何がさて、東は青森より西は福岡より、集り來れる一百餘名、宗籍は日蓮・顯本、本門、本妙は云はずもがな、淨土、禪、眞言、さては蓮門教の奇人物もあり、隨て珍妙不可思議の交名行はれ候、就中最も振つたものを着到の順により列擧すれば「私は是非皆さんに覺へて居て貰ひたい、宗籍は日蓮宗ですか、但し現今の腐つた日蓮宗ではない」と慨然としてすご味を帶びしものは備中庭瀬の高塚源一君、「私の宗籍は日蓮宗でも顯本法華宗でもなし南無妙法蓮華經宗なり」とやつてのけたのが栃木の服部新五郎君、「僕は小學校教員で家

は曹洞宗だが、高山博士の文章によりて日蓮渴仰の人となつた」と況後錄の暗誦を續くること五分間に渉つたのが甲州の小尾菊雄君、「越後生れの横濱育ち今ぢや片瀬で法を聞く」と洒落たのが日宗大學の星野旭泰君、「宗教は不幸にして未だ何とも確定しませんが、夫を得たならば東洋の平和に貢献する所多大ならんと存じて、此會員に列した」と極めて眞面目に陳べたのが清國人東洋大學生阮鑑光君（廿六歲）である、其他種々雜多の奇談妙說あり、特に「生地は銀座二丁目現住所は伯父さんとこへ預けられて居ます、學校は尋常四年で年は十一、宗旨は日蓮宗、報告終り」と無邪氣にやつてのけた、會員中最年少者の岩田武君と、「所は岡山市旭町、職業は農、宗教は日蓮所立の神道、年齡は六十歲」と大眞面目に陳べ立つた最年長者の山海明八郎君と、その對照の妙、まだなく奇ならずや　笹川君貴下

次の日誌に移るべく候、

廿三日（金曜）　快晴　午前八時開講、司會者山根幹事開目抄の結文を拜讀し、會衆一同合掌作禮題目唱和、子爵小笠原講師、海軍大佐の正服にて登壇『海國歷史と日蓮主義』の題下に、其豐富なる歷史的材料と其明晰なる頭腦の秤量もて、巧みに海國主義の消長と日蓮主義の盛衰とを論斷する所、流石は當代海軍參謀部の名士よと證へざるものなく、且つ其上人に寄する熱烈の信仰、人をして層一層の敬意と注意とを拂はしめ申候、大佐の講演は九時三十分にて小憩、仝三十五分司會者の紹介によりて日宗新報主筆加藤文雅師は、清水龍山師の補講として『法華經は日本國の豫言書』なる題もて、十時二十五分迄講演、輕快なる語調やゝ演說の傾きありしも、秩序亂れず論證的確、頗る有益なる講話にて候ひき、仝十時三十分より小笠原講師の續講ありて十二時二十分講了、此時司會者は高島講師先刻病痢をつとめて出席ありたり、午後四時より講演あるべければ、會衆諸君海水浴をば三時半迄に切り上げてよと告ぐ、午後四時高島講師登壇、『日蓮上人の文學』と題する講演あり、溫雅にして崇高なる氏の講演振り、轉た人をして敬愛の念を涌起せしめ、上人の御文章を縱横引證し來りて、鎌倉當年の他のものと比較し較量する所優に博士の貫目あるを認め候、五時半講了、司會者閉會を宣して報恩抄の一節を捧讀し、會衆一同合掌して題目唱和、

廿四日（土曜）　快晴　午後八時十分開會、關田司會者四條書の龍の口云々の一節捧讀、會衆合掌唱題、無

辯の雄辯もて名高き三宅雄二郎博士登壇、此日博士は演題未定ならで、特に撰んで講題を『大難に就て』と標榜せられ候、壇に登りて悠然たるもの相變らず二三分時、會衆は片唾を呑んで其開口を待てり、博士は先づ口を無叉々々して曰く、日蓮上人は天晴れぬれば地明らかなりと仰せられたが、けふ此頃は天晴れぬれば地熱しだ……衆呆然として呵々大笑、此調子ならば又々例の通り腹の皮を撚らせられるのか、この熱い九十五度の大暑に笑はせられるのも、隨分大役だと思ひ居たりしに、何ぞ圖らん博士は極めて眞面目に、上人の大難小難に關する事等何くれ有益なる講話約一時間强、また諧謔戲笑の微影だも留めず、熱心面に溢れ流汗手巾を潤ほすを見受け申候、九時三十分より十時三十分迄、仝四十分より十二時迄の二回に亘りて、唯一佛教の主筆清水梁山法將の『日蓮宗の名稱に就て聖祖の御遺誨』と題する講演あり、氏亦病中の人、信書に電報に再三出席を斷はられたるも、幹事よりの數回の懇請に餘儀なくせられて出講せられたるもの、されば痩癯さながら鶴の如く、雙頰こけ眼窩窪みて數日の絶食を證據立てつゝあり、而も性來の熱誠、脚一度び講壇を踏むや、亦病弱の身にあるを知らざるものゝ如く、横說縱說激烈の語調もて、日向記御義口傳の秘鍵を振り翳す所、流石は現代の法將たるを疑はざらしせ申候、更に午后四時より五時まで、鶴田堯惇僧正の『御書に現はれたる日本國及大日本國』の講演あり、僧正の講演や、講義と云ふよりも寧ろ演說に類するものならんも、氣魄と機轉とに富める僧正、巧みに會衆の耳目を自己の一身に集注せしめ、或は笑はせ或は怒らせ、圓轉滑脫鬼まれこの變妙の講題を演了せられたる、亦偉磊かなと首肯かせ申さしめ候、かくて司會者閉會を宣し、祖書捧讀一同唱題例の如し、明くれば

廿五日(日曜) 快晴 此日は鎌倉靈場參拜の日取りにて、豫て掲告有志者を募集したりしが、募りに應ずるもの無慮六十八名、午前四時起床、四時半喫飯、五時出發、山田幹事軍隊式に一同を會場前の芝生に整列せしめて、點呼檢閲を了し、案内說明者片野玄貞君、祖書朗讀掛り關田幹事、總指揮官山根幹事なることを宣言し、雙て二列の行軍式によりて萬歲聲裡龍口寺門前に出で、腰越七里ケ濱を經て行合川に牽祖當年の死罪特免を偲び、左轉して山谷の草踏み分けつゝ田邊ケ池に新雨の舊跡を討ね、此處に片野氏の說明と關田幹事の良觀新雨御書の朗讀とありて、もと來し路を行合

川に歸り着き、更に濱邊つたいに行くこと十數町にして稻村ケ崎に新田左中將弓流しの古蹟を訪ひ、轉て良觀坊の住めりし極樂寺に迫りつく、此處にて片野氏忍性菩薩と日蓮上人の關係を說明して、言癩病寺云々に論及するや、寺僧蒼皇として走り來り、否とよ日蓮上人は此門前は通らざりし、良觀上人は日蓮坊に唾吐きかけし事もなく、癩病になりし事實もなしと顏赤らめての辯明可笑くもあり又殊勝にもあり、されど幹部は此處に時間を取られては豫定の參拜に喰違ひを生ぜんことを恐れ、一同引上げと命令せしも、何がさて客氣に富める青年の一團、その制止を聞かばこそ、面白半分に寺僧を相手どり良觀の木像若し惡臭を放たずとならば、其實物を見せよと迫り、見せるともと終に無料の什物觀覽をなす抔、埒もなき事に手間取り候、幹部は極樂寺切通しに小憩して待つこと十數分、やがて人數も揃ひたれば急速前進、坂下の星月夜に渴を醫し、鎌倉權五郎の社頭を過りて長谷の四條金吾殿屋敷跡に着、茲處にて後發隊の電車便を迫りし足弱連中と合す、邸はもと相當の寺院なりしも、時世の變遷に廬裡破れ本堂頽れ、今は敬玄菴と銘打ちたる三間四面の破屋淋しく立てるのみ、剩へ向て右手の廬裡跡は今や鎌倉祭行長谷支店の建築中にて候、適れ法經宗の四條金吾の舊跡、げに涙の種にて候、關田幹事四條抄の一節を朗讀し一同唱題唱和、片野氏興廢の歷史を說くこと詳密、且つ曰く、他日若し復古の企畫を聞かば諸君奮って賛助あれと、衆傾聽誰か此聖地の復興に異議あるべき、雙て涙の裡に歩を北して光則寺に日朗上人土牢の舊跡を訪ひ候、げに質實の土籠何等淫祠的裝置なく、坐ろ六百年の昔を偲ばしめ候、關田幹事土籠御書の全文を捧讀し、一同合掌唱題、かくて廬裡に休憩麥湯の接待を受く、休憩中此間にと長谷觀音さては有名の大佛を觀るもの十數人、關田幹事は土牢の前階にて鉄さたればとて、參拜者の利便にもと即刻寄附を募集す、我も〳〵と喜捨の淨財若干圓、寺主村野日彰氏に托して朽廢せる石階の再建を依囑いたし候、

雙て此地を發して東行松葉谷の安國論寺門前につく、時正に十時弱午餐には未だ早けれども日程には記せざりしも、お猿畠の舊跡參拜志望の方は奮發せらるべし、往復一里の山路、足弱の方は當山にて休憩待合はさるべしとの柴田幹事の宣言、何がさて勇氣凜々たる會衆十中の九分までは猛然として歩を南々東に轉じ候、横須賀街道の平坦々、行くこと十數町にして左折枝路に

入りて險坂となり、仰ぎ見る山王の社、手にとる如くにして而も一歩一喝、漸くにして猿畠山法性寺の堂前に攀ぢ登る、休憩少時にして山根幹事報恩鈔の一節を朗讀し、片野氏松葉谷燒打と關聯せる當山の由緒を說かれ候、かくて開基朗慶和尙請來の日朗上人眞骨を拜し、更に山巓の山王社を一瞥して舊道を松葉ヶ谷に歸着いたし候、安國論寺に午餐を喫して午後一時發足に臨み關田幹事種々御振舞鈔の一節を朗讀し、片野氏當山の由緒を說くこと詳密、げに當山は宗門發軫の策源地にて候、斯くて安國論寺日蓮聖人王殿(御小菴の跡)の拜觀を濟し道に牡丹餅寺を經て比企谷妙本寺に着、日法上人親刻の一木像三體の祖像を拜し、關田幹事の大學三郎書の朗讀片野氏の由緒說明濟みて書院にて小憩、茲處に師子王文庫よりの特使中村旭鶯氏に會し、相伴ふて東身延本覺寺、大巧寺、さて十鐘冠親師忍辱鍛練の古跡妙隆寺を歷て小町辻說法の舊跡に詣ず、關田幹事御振舞鈔の一節朗讀題目唱和、夫より鶴ヶ岡に如何に八幡の往昔を偲びて、左轉右折扇ヶ谷に向ふ、今小路にて師子王學衆數名の丁重なる出迎を受け、やがて豫定の如く午後三時かなめ山に着いたし候

さても師子王文庫の結構設備今更言ふも愚かのことと要山居士が至誠祖道を思ふの切なる、けふの參拜團体を歡迎せられし其態度親切殆んど感謝に辭なきを覺へ候、滿堂に裝展せる宗史繪畫及び敎育勅語の實物敎授書、さては鐵鎖泉の浴場設備等、會衆一同唯何となく旅より歸りて慈親の膝下に溫情の慰藉を受くるの感を懷き申候、やがて一同の懇請により正境寶殿の拜觀を畢へて庭園の觀覽に移り、春待山に「ラムネ」の接待を受けし抔、今更ならぬ歡待優遇謝するに餘りある次第に候、時針正に五點、さらばとそこ〳〵に暇を告げて一同文庫の玄關を辭し、茲處にて隨意解散を宣告したり若き人々は再び徒步にて歸るもの、あるは大塔宮の古陵に、あるは建長寺圓覺寺に史籍をあさるもの抔、おのがじゝ特殊の行動をとりしが、幹部及び大多數のものは電車にて歸途に就き申候

留守を預りし山田幹事は、今夜の演說會準備に多忙を極めし由にて、小生等の歸着せし時は、祖師堂の裝飾殘る隈なく行屆き、やがて午後七時を以て『開會の辭』を山田幹事によりて演ぜられ、『日宗新報』の記着加藤文雅君は「現代の要求せる宗敎」を、辯護士松本郡太郎君は「吾人の信仰」を、『天鼓』主筆柴田其年君は「矛盾と調和」を最後に清水梁山先生は「皇室に對する

我宗徒の覺悟」を演ぜられ候、勿論二三日前より廣告萬端行屆き、特に廣告鏤一千枚を江の島の客舍に配布せしことゝて、聽衆滿堂殆んど立錐の餘地なき大盛況にて、各辯士が熱心日蓮主義の鼓吹に努めたる、拍手の響き、喝采の聲、天地も爲めに動せんばかり、とりわけ松本辯護士が持病の喘息に惱めるにも關らず、水垢離とつての洋服いてたち、滿幅の信仰を披歷して言語よどみなく、これても病弊の人かと思はしめ候始末、感動一入なるを覺へしめ候

笹川君貴下　第一信は之にて止め、更に後半の消息は成滿の曉可申上候、敬具

第二信

笹川君貴下　天晴會は眞に天晴會にて、名詮自稱かあらぬか、毎月の例會に雨天若くは曇天の事なく、さすが入梅の六月例會も、昨日まで「シト〳〵」と降り續きし雨が、夜來「カラリ」と晴れて天晴となり申候、小生等實は何とも氣付かざりしが、吉田海軍中佐が其事を噺されて、感程と感づき申候、坐に林旅團長あり、天長節に雨なしとの事實談を持出され候、天長節と天晴會、げに芽出度事の極みに候、さればよ本講習會も亦昨日まで天晴にて候、飽度此調子では結日まで天晴なるべく候、けさも今朝とて海水浴場の老爺が申すには、お蔭さまで天晴會の講演が開けて已來晴天續き、まことに結構樣で御座りますとの挨拶にて候、あだしごとはさておき、いざや再び日誌の筆を辿るべく候

廿六日(月曜日)　快晴　午前八時開會、山根司會者松野殿御書齋盜法師の一節を拜誦し會衆首題唱和、『法華經に就て』の題下に姉崎博士の講演あり、阿含と法華の對校研究、趣味津々、特に現代の通弊たる科學萬能を喝りて、斯かる者輩に何の宗敎を云爲する權能かあらんと叫ばれたる所、確かに時代の病弊を濟ふの力あり、宗敎家の立場から申すも異なるものゝ、何だか三伏の炎熱に一服の淸凉劑を得たるの心地せられ候、博士の講演は一時間にて、九時小憩、能所一百四十人餘、五重塔の崖下にて、日宗大學の井口敎授の手によりて紀念の撮影あり、右終て更に十時より十二時まで、要山居士田中先生の講演有之候、先生の講題は『宗門小史話』にて御承知の痒い處に手の屆く樂說無碍辯、或は永享法難を或は常樂經諍を、あるは鐘冠親師の事歷あるは天文法亂の顚末等說き去り說き來りて、時に或は猛虎の鬨によるがごと、時に或は疾風砂を捲くが樣、

人をして喜怒哀樂交も至りて應接に暇なからしむ、かくて時間の制限に惜しき講演を閉ぢ、司會者閉會を宣して祖書朗讀一同首題唱和、別室に於て先生侍者の携へ來りし、經師自筆の曼荼羅及び宗門歴史畫展開、山川智應氏の說明あり、耳より入りし史談は更に目によりて、一段の印象を會衆の頭腦に殘すへく、何處々々までも文庫式の活說法、感ずるの外無之候

▲▲▲廿七日(火曜日) 晴 午前七時開會、山根司會者撰時鈔の三大面目の一節拜讀、會衆題目唱和、此日科外講師今成僧正の講演あるべかりしが、病氣欠席關田幹事に代講たのむとの飛電ありし旨、司會者の報告且つ紹介により關田師登壇、『日蓮上人の人格及び主義』の題下に一時間半の講演あり、信い哉時間に制せられて、僅にその人格の半面を說きしのみにて、所謂日蓮主義の要訣を聞くを得ざりしは、會衆一同の遺憾とする所、次に九時より十時二十分まで三上博士の講演あり、講題は『日蓮宗に對する希望』にして、歴史家の立場よりして、爲宗の好意より出てし日蓮門下に對する側面攻撃の一矢萬矢、確かに手應へありしは愚かのこと、破天荒の三十捧、門下の僧俗何とも早や申譯なしと謝するの外なし、特に明治維新の歴史に於ける水戸家の位置を引證して、さしも數代勤王を以て聞へし水戸藩が、維新大切の時季に於てあられもなき內輪喧嘩に火花を散らして、皇政復古の大事に參せず、可惜薩長土の三藩に其功名を奪はれしは、現今日蓮門下の各教團が徒らに兄弟牆に鬩いて靈界の奮進努力を等閑視せるに對し、好箇の教訓ならずやと斷ぜられし所、眞に穴あらば入へも入りたき心地せられ、慚愧言ふ所を知らざる次第に候、更に十時三十分より姉崎博士の昨日の續講あり、沈痛深刻なる博士の講演は、層一層其歩を進めて、恰かも皮膚を剝き肉を穿ちて骨髓に徹するの慨あり、論證的確鋭熱面に溢れ、法華研究の体度行程は誰人も斯くありたしとの感あらしめ申候、斯くて時針十二時を報じければ、司會者十八回滿鈔の結文を朗讀して題目唱和、本日の講筵を閉ぢ、

更に午後七時より、殘んの交名紹介を兼ねて感想會は開かれ候、此度は一定の會費を要求せず、思召の喜捨をと水浴帽子の堂々廻り、相變らずの片瀬饅頭に麥湯の清筵 山田司會者の開會宣言に次て、市川禪海君軍艦初瀨の沈沒狀況を語る、君は海軍大尉にして初瀨生存者の一人、而も右足を折りて痍疾の身となり、近き過去に所感ありて身を禪門に投ぜしもの、小笠原子

爵の伴い來りて此講習會に席を列せるにて、師僧より早く歸來せよとの信書に接するもの數次、而も日々の講演に日蓮主義のひし〳〵と身に滲みけるものか、さいよ師僧の謦欬を受くるも此清筵を中座すべきやの意氣込、初瀨沈沒の概況を語りて且つ曰く、自分は何事も實地に研究の上得心が行かねば首肯せざる男、日蓮上人の人格には昨今多大の敬意を拂へり、其主義の自分に首肯せらるゝ時到らばマッ斯の通りと頸に掛けし禪袈裟を抛つ身振りの男らしさ、喝采の聲暫しは鳴りも止まさりき、君の感想談終りし一刹那、關田幹事は軍艦初瀨乘組戰沒將士の靈を吊ふべく、會衆の一齊唱題を求めて徐ろに十一通御書の爲國爲君爲一切衆生の一節を朗讀す、市川君等卓の前に直立して、施主として合掌以敬心の姿勢嚴然、一同と共に聲高らかに七字の梵音を唱和す、嗚呼何たる聖き手向ぞやと覺へず寒毛凜立いたし候、次に況後錄の朗讀博士小尾菊雄君の教育上實歴談、さては日宗大學の小林甚裴君、岡山日蓮研究會の松崎事成君、新報記者加藤文雅君等、その他二三の感想談あり、何れは青年客氣の憂宗家、言ふ處宗門を思ふの餘勢に出てゝ悲憤の叫び、慷慨の聲、滿堂肅として日蓮主義の橫溢せるを見受け申候、時針十一時を過ぐること二十五分、司會者閉會を告げて一同眠りに就く

▲▲▲廿八日(水曜日) 快晴 午前七時十分開會、關田司會者異躰同心抄拜讀一同首題唱和、科外講演として陸軍大學兵學教官細野少佐の『國民的性格と日蓮主義』の講演あり、少佐亦天晴會發會當時よりの會員にして、信仰殆んど堂に入り、辯論舊冴、約五十分の間此講題を說き得て餘韻あり、次に文學士小林一郎氏は八時より九時二十五分迄と、九時三十分より十一時迄の二回に分ちて『日本文明史上に於ける日蓮上人の位置』と題せる講演あり、舌鋒輕妙にして懸河の如く、論理整然として一絲紊れず、而も迫り難き日本文明史を叙說して滔々數千言、聽者をして些の厭倦を生ぜしめざる手腕、眞に敬服の外なく候、最後に雜誌「村雲婦人」の主筆權僧正松森靈運師の『日蓮上人の女性觀』と題する講話あり、師亦一方の明星、專攻の女性觀を提げて、炎熱蒸すが如き時間に堂々其所感を披瀝せらる、感謝に堪へざる次第に候

此夜會員の申合にて信仰座談の開催ありしが、幹事は事務の整理に忙殺せられて、遺憾ながら其席を辭す能はず、其狀況如何と氣遣ひ候ひしに、明けて

廿九日（木曜日）　快晴　左の建白書を接手いたし候

建白書

吾等同盟は故に時代の大勢に察し各講師論講の趣旨に鑒み各教團主張の如何は暫く之を措き成るべく區々の情弊を排し專しく　聖意を中心として各自の一致融和を計り協心努力内は以て異教同心の調調に叶ひ奉り外は以て普師教法の大義を全ふせんことを期す御會願くば此意を諒察せられ適當の方法によりて各教團融合の實を擧げられん事を切望の至りに堪へず謹んで建白する所如件

明治四十二年七月廿八日

天晴會夏期講習會員代表者

赤羽宥松
野村智秀
星野旭泰
藤本定治郎
中田量叔
松崎事成
高塚源一

日蓮宗御天晴會幹事御中

けに　以ある要求、幹部は心地よく之を保留して、時運の一日も諸君の要求を實現するに速かならんことを望むと同時に、諸君が我等幹部にのみ之を托せずして、所謂東西呼應老幼協和の誠を致されんこと希はざるを得ず候

午前七時開會、柴田幹事祖書捧讀一同合掌唱題、小林文學士昨日の續講として登壇せられ、八時小憩再び九時三十五分迄講續、略ば其所論を講了せられ候、次に九時四十分より境野黃洋氏の『鎌倉時代と日蓮上人』と題する講演あり、歷史に精通せる氏が明晰なる頭腦より迸り出る所論、などか感のあるべき、引證該博にして鎌倉當年の風俗人情手に取る如く、而も偉人石蓮を介して時代の一點睛となす所、流石は當代一流の講師よと首肯せしめ候、十一時强講演を閉ぢ、司會者の祖書朗讀一同の唱和例の如し

此日午後一時より龍口寺祖師堂に於て靈寶の展覽を許さる、展覽は寺にとりては容易ならず、監督執事總代等立會の上ならでは叶はぬこと、貫首藤原僧正の好意にて特に講習會の能所に拜觀せしめらるゝ所、好意多謝の外なく候、七字七福の曼荼羅、聖祖所用大龍王の幡、棧敷女房鍋蓋の本尊　龍口法難赦免狀等、古色蒼然考古の料多く候、塩崎君說明の勞を取られ候

夜に入りて要山所藏の御靈跡幻燈影畫の會あり、師子王文庫より別枝智敎田中澤二、藤橋旭阜の三君特に來り　說明の勞をとらる、感謝の外無之候

三十日（金曜日）　快晴　午前七時開會、山田司會者

祖文捧讀一同合掌唱和、小林文學士言ひ殘せし事ありとて、聖祖身延御隱栖に關する所見を演べらる、七時二十五分より八時半迄境野講師の續講あり、野口日主僧正は昨夜病を冒して來會ありしも　顏だけ出して講演は御免候へとの事なりしが　折角の出席是非短時間にてもと無理に請して、八時三十五分より九時五分を『偶感一則』と題する講演あり、法華骨なしの俗諺に就て所感を披瀝す、言簡にして意長く、亦其要を得たるものに候

斯くて一旬の虛空海會魔事なく終了、九時十五分もて左の式次により、嚴肅なる閉會式は擧行せられ候

式次――一、閉會の辭――關田幹事（演說）　一、決算報告――山根幹事　一、謝辭――日宗新報記者加藤文雄（朗讀）――會員惣代山形日宗團佐治吉右衛門（演說）　一、挨拶――講師代表小林文學士　一、萬歲三唱――山田司會者發聲會員一同唱和――天皇陛下萬歲――天晴會萬歲――夏期講習會萬歲

笹川君貴下　右にて第一回の講習會は結了を告げ候　茲に成滿を祝する爲め、午前十一時を期し江の島岩本樓に大懇親會を相催ほし申候、來り會するもの無慮八十餘名、流石の同樓々上の大廣間も狹隘を告げ、椽側に張出して配膳を爲すの爲体にて候、講師としては小林、境野、野口の三氏の外に、特に本日態々東京より來會せられし本多大僧正を加へて都合四名、鎌倉の田中居士が欠席せられしは遺憾此上なけれども、本化大學建築用にて大多忙との事是非もなき次第に候、斯て午後〇時十五分柴田幹事開會を宣告すると同時に、象て師子王文庫へ特に要請して宗曲船守の一曲演奏を依頼しありしが、演者旅行中にて遺憾ながら間に合はず、その代り御持合せの餘興として會員諸君の隱し藝御遠慮なくとの挨拶あり、酒瓶開き箸動くに至りて、高塚源一君の動議により、高塚服部佐治の三君、會員を代表して立つて講師と幹事との前に來り、別々に改りて謝辭を述べられ候、次て境野講師の挨拶、阮鑑光君の支那語の辭去來、小尾君の快客五人男、柴田幹事の劍舞拾見、附山田幹事の吟聲等、その他雜多の餘興涌起して歡興限りなく午後三時芽出度散會を告げ申候

笹川君貴下　かくて我等は講師と會員とを岩本樓玄關に送り參らせし後、更に雜誌記者と及び此會に當ならぬ幹旋の勞を取られし、片野塩崎の兩君を伴ひて金龜樓に席を轉じ、浴後　淺酌心ゆくまで宗門前途の何くれ相談じ申候、互ひに睨み合ふて居ればこそ涙別の

觀念もあれ、日夜寝食を共にして一旬の聖業を全ふし、並に互ひに彼此の思ひなく無禮講の酒三行、共に是れ大雷の御門人との感は、口にこそ言はね心に同じからざるべきやは、どうか此後共何日までも斯くありたき事に候

笹川君貴下　筆の次手に雜感の數々左に列記いたすべく候

鎌倉靈跡巡拜の案内は、兼ては師子王文庫の同人衆に頼むべかりしも、田中先生の談に、否とよ予の門人共は兎角熱誠に過ぎて、やゝもすれば問題を惹起すの嫌ひあり、先年橘香會主催の講習會の時も、極樂寺の説明に寺僧との間紛紜を生じたる例もあれば、今回は他の人々にて宜敷頼むとの事なりし故、幹部はげにもと、極めて温厚篤實の聞へある片野君を煩はせしに、相も變らず極樂寺の小紛紜、良觀と日蓮上人――極樂寺と聖祖門下、何だか妙にこんがらがつた間柄、兎もあれ「むさ」になつて良觀を辨護せる極樂寺の和上、賞めてやらざるまいと存じ候　お年は未だ若いのに

小笠原子爵の信仰を喚び起せし樓賃の下男とは、何を隠さう小生の法弟野口會英の前身にて候、廿三日子爵の講演前、小生は野口を子爵に紹介致し候、然る處子爵の歡びたらない、ヤーあなた久しく遭はせませんかつた、實は中外日報の記事も半信半疑でしたが、事實てあ　ましたな、こんな嬉しい事はありません……只見る子爵の双眼には時ならぬ露……併しあなた喜んで下さい、あの時から自分はお蔭で信仰の人となりました、其時の書生も今はみな立派な獨立の人間となつて居ます、聽てそれ等も皆蛇度有信の人となります、どうか此講習會結了の上は宅へ來て下さい……傍に聞く小生も何となく嬉しくなる申候

幹事の役割を、柴田君は外交掛、松本君は講師接待掛、山田君と關田君とは奇兵隊として、さて小生は庶務掛の會計主任と云ふ貧乏籤を引き申し候　少し講義を聽て居ると直ぐ事務室から聲がかゝると云ふ風にて十日間晝夜風通し惡き四疊半の事務室へ詰め切りの爲軒、海水浴も前後四回しか行くを得ず、是が隅田のはとりか何かなら酒落れたものに候へども、熱苦しさと辛氣くさいたらない、おまけに郵便切手まで賣らせられて、何の事はない逆戻りのお納所坊主、けれども何事も佛祖への御奉公と、犧牲の感念に住してとう〳〵勤め果せ申し候、松本君も持病の喘息てさぞ辛らかりしならん、柴田君も炎天晒しの果奔走、嘸ぞ骨が折

れつらん、山田關田の兩君も内外多事てさぞ疲労れ給ひなん我身つねつて知る人の痛さにて候

會員の全般が至誠敬虔の体度を維持して、露ほども我慢や苦情の出なかつたのは、何よりの事にて、鍔金鎔石の時節柄心配して居た病人とても、ほんの僅かに中田君と相澤君とか、少し腹痛で念の爲め醫師の手を煩はしたのみて、早速の快癒、其他何の魔事障害もなく成滿を告げ候、剩へ懇親會場て會員代表としての三氏の改まつた謝禮を受け候、幹事の身のうら耻かしさ、本多講師の談に一れば、何處の講習會ても講師は通り一遍の謝辭を受けるが、惡まれ役の幹事が會員から禮を受けたのは見始めだとの事　是も全く聖の加被にて何の我等が力てあらうと益々自省仕り候

龍口寺の二組の繪葉書を、會員には半額てお讓り申せと、藤原貫首のお聲が掛つて、祖師堂の帳場ては大恐慌……それも其等半額ては些の口錢もない、さり迚鶴の一聲是非もないと云ふ始末、此一事ても貫首の爲人は知れ候、何しろ七十二歳の老躰を以てして十日間正装して熱心に懇諦せられた其お心根、殊勝とも希有とも、げに貴むべき人格と申すべく候

幹事柴田一能君が、身日宗大學の教頭を以てして、三文奴のそれの如く、東西奔走の勞を取られ候事、寔に感謝の外なく、徒らに我有大乘を極め込んて些細のことに感情の何のと、勿躰振りてすね廻る他人こそらせの祿てなしは、ちと一　先生の爪の垢ても煎じて飲ませたく存じ候　特に小生をして先生の挙動に一層の敬意をはらはさしめ候事は、先生の親孝行にて候、廿四日態々日蓮りに八王子から北堂を迎へ來りて、廿五日の盤場參拜に伴ひ參らせ、お猿畠の難路を手を取り或は腰を押してのいたはり方、坐ろ草山和尚の往事を思ひ出して、嗚呼小生は何たる親不孝ものぞと、慚愧の情に轉た小さき胸を懐き申候

初日に撮つた佐藤氏の寫眞は、六日目にちやんと三枚一組の繪葉書となつて會員に配布せられ、六日目に撮つた井口氏の寫眞は成滿の日に悉く會員の家づとゝなり申し候、はて又手便利の世の中にて候

笹川君貴下　書き度きことは海山なれど、餘りに山鳥の尾も讀者厭倦の種、これにて惜しき筆止め、左に列席會員の芳名を錄すべく候、敬具

天晴會講習會參列會員列名表

住所	學校	職業	宗籍	氏名	年齡
福岡市外下筑固村六〇六	福岡中學卒業	學生	淨土	牟田敏治君	一八
東京府下瀧野川村四ノ一	東洋大學	同	眞言	戸田文雄君	二三
京都府與謝郡日置村妙饒寺（京都市羽生）	二本榎大檀林	住職	日蓮	野村智秀君	三八
同 朝霞村六萬部	京都	同	同	大村觀壽君	三四
同山鄙吉備郡庭瀬町（美作倉敷生）	關西法律學校	同	曹洞	高塚源一君	三二
同山市內山下町三二（備前四大寺生）	高等中學校	第六高等學校	學生	松崎事成君	二八
同（同和氣生）	山中學校	同	同	中川荒君	三四
山梨縣甲府市太田町	同	商	時宗	相澤卯吉君	一八
同 伊勢町	同	日蓮		柿島元定君	一七
栃木縣蘇木後町	糸絲商	同		服部新五郎君	三一
同驛谷郡北高根澤村	農	同		赤羽宥一君	五一
山梨縣北巨摩郡小淵村	書工	同		繁宮久遠君	三五
青森市浦町（盛岡市出生）	山林屬	顯本		阿部秀造君	
東京市本郷區駒込淺嘉町（山口縣萩出生）	東洋大學	學生		太田貞彥君	二三
同淺草區玉姫町一木堂寺（靜岡生）	住職	本門法華		久野泰勉君	三八
山梨縣北巨摩郡甲村	大成中學卒	小學教員	元曹洞	小尾菊雄君	二九
兵庫縣美嘉郡溪河村	農	元禪今日蓮		藤本定治郎君	三〇

住所	學校	職業	宗籍	氏名	年齡
東京府荏原郡大崎町（鎌倉高木生）	日宗大學	學生	日蓮	宇野龍信君	二二
同北豐島郡高田村雜司ヶ谷（遊江吉美生）	東洋大學	同	顯本	吉田堅精君	二七
同（姫路市俵町生）	同	同	同	熊井本光君	二四
東市京谷區南寺町法恩寺內（同谷生）	城中學	同	同	富田良達君	一八
同小石川原町一六（大倉池田生）	東洋大學	同		金澤種美君	二一
同淺草區北三筋町五五（安房鯨鯨原生）	岩城醫專	看板工	顯本	中西貞幹君	五二
千葉縣印旛郡川上村砂木源寺（美作勝山生）	藝館	遊藝者	同	增田聖道君	四一
東京府下中目黑寺內（越後高生）	日宗大學	學生	日蓮	小林是恭君	二三
同芝區白金三光町五五（越後生）	中央大學	同	元時宗今日蓮	本間駒吉君	二一
京都六角堂前川崎銀行作事場內（東京神田生）		石工	日蓮	田內利三郎君	
東京市芝區高輪北町三〇（丹波亀岡生）	高等商業卒	外務省官吏翻譯官	同	田中慶三郎君	
靜岡縣富士郡傳法村大淵津中學井賀谷方（三河鳴嶋生）	第一高等學校	學生	同	浦野松太郎君	一八
東京府荏原郡品川町木光寺內（米沢藩士）	同	學生	顯本	佐藤重賢君	二二
同妙蓮寺內（福岡縣生）大學東洋	同	同	同	中原通應君	二九
神奈川縣中郡須賀村				長須賀ろく君	
東京市小石川大塚上町一〇	早稲田高等師範部生	學生		安原清太郎君	

住所	學校	職業	宗籍	氏名	年齡
埼玉縣北足立郡與野村鈴谷八農			日蓮	遊馬慶太郎君	四七
愛知縣知多郡緒川村（德境寺（三河岡崎生））	顯本大學卒業	住職	顯本	石川顯隆君	二九
山市形旅荒町四九九	醫清釀造業	日蓮		佐治吉左衛門君	四六
横濱市根岸町大圓寺內（越後生）	日宗大學	學生	同	星野旭泰君	二六
東京市本郷区石川茗荷谷町茗谷學園（越後米日川生）		同	同	八木友眞君	二五
栃木縣栃木町一乘院		住職	同	福岡玄瑞君	
東府荏原郡碑衾村碑文谷一八三	農科大學	學生	同	安藤又五郎君	
同駒町區駒田町六二三（秋田青英館秋田生）	東帝大學	同		加賀谷朝藏君	
東京府荏原郡池上林昌寺內（上總大竹生）	日宗中標林卒業	雜誌記者	日蓮	島田勝存君	二八
同小石川名谷學園	高等商業	學生	同	井上義吉君	二三
同荏原郡大崎町日大寄宿舍（山口下關生）	日宗大學	同	同	岡本潮照君	二三
同郡蒲上村（銀座生）	尋小四年小學生徒	同		岩田武司君	一一
東京市牛込區四五軒町四（福井縣生）	東洋大學	學生	本門法華	上島圓妙君	三一
同 姫路生）	帝國英語學校	同	同	小島玄啓君	二九
同麻布區永坂町三四	麻布中學	同	元禪今日宗	新井己千雄君	一七
同本郷區森川町一新泉館內（清國人）	東洋大學	同		阮鑑光君	二六
同淺草區新谷町慶印寺內（宇都宮生）		僧侶	顯本	大川圓精君	二六
姫路市有軒町邱妙善寺（上總生）		住職	同	野口會英君	三一
横濱市米ヶ濱龍本寺（福井縣生）	早稲田專修科	同	日蓮	西谷龍顯君	四〇

住所	學校	職業	宗籍	氏名	年齡
神奈川縣三浦郡葉濱村茅山	日宗大學	學生	同	鹽田辨京君	
山梨縣廷身久遠寺內（秋田生）	日宗大學卒業	檀	同	島智良君	三四
同（美作勝山生）	身延小學林	學生	同	淺野威寛君	
東京日本橋區柴研堀町一九		同	同	大貫忠次郎君	
青森縣三戸郡長者村本壽寺（千葉縣生）	顯本大學林卒業	住職	顯本	中田量叔君	三三
相模片瀬東海寺（東京神田生）		同	日蓮	竹內練應君	三六
千葉縣行德町	女子師範	學生		野地きく子君	
東京京橋區南鞘町二ノ一（遠江中村生）		羅紗洋服商	日蓮	維賀秀太郎君	五七
越後比金谷鈴木寺內		僧侶	同	龍門通存君	
東京豊多摩郡西大久保村三九	陸軍大學	兵學教官	同	細野辰雄君	
同小石川名谷學園（甲府生）	慶應大學	學生	日蓮	志村玄誓君	二〇
同牛込區山伏町		酒商	同	三田房吉君	四一
同		同	同	仝 俊一君	
同淺草區新谷町慶印寺內（上總生）	豆腐中學	學生	顯本	仝 かね子君	
同山縣吉備郡高松村		商書籍、酒、活版	日蓮	武田顯龍君	二〇
神奈川縣橘樹郡大綱村大豆戸		醬油商	顯本	古田吾山君	
横濱市南太田町二一三三		商	同	上郎清助君	
鎌倉小町妙隆寺		住職	日蓮	倉多學仁君	
神奈川縣程ヶ谷町		商	同	鈴木熊造君	
東京下谷區北稻荷町蓮城寺內（神奈川生）	早稲田大學	學生	同	丸山英覺君	

栃木縣下都賀郡栃木町字大町　商　同　田代善平君
神奈川縣足柄下郡上府中村千代　住職　同　古宮惠詳君
栃木縣栃木町萬町　商　同　大森梅吉君
東京大久保百人町全龍寺内　海軍大尉　僧侶　市川禪海君　二七
同日本橋區大傳馬町二ノ一五　商　同　岩戸清次郎君
栃木縣栃木町　同　日蓮　大塚金兵衛君
横濱市花咲町二丁目　同　同　樋口登久治郎君
同　同　仝　つね子君
同　同　谷澤勝五郎君
鎌倉大町　同　同　金子てる君
同　同　同　金子健藏君
東京浅草區吉野町興常寺　宗教講員　同　鈴木日雄君
同　安盛寺　同　同　藤崎通明君
同　常福寺　住職　同　金坂義昌君
同　東洋大學　學生　同　吉永義彦君
相模國　日蓮　酒井正吉君
東京麻布區品川町北品川　商　同　高柳藤次郎君
同日本橋區馬喰町四ノ廿三　國學院學生　同　野澤玄真君
同　柴垣經寺内　僧侶　同　和田玄君
同山市下市町　女子大學卒業　顯本　栗原久滿子君
鎌倉大町大寶寺　住職　日蓮　中谷潮滯君
靜岡縣駿東郡藤岡村神山本國寺　住職　本門法華　芹澤泰詮君
東京浅草區町二九　僧侶　日蓮　望月清吉君　四六

同　向島　雜誌記者　同　高梨要三君　四四
同京橋區入丁堀岡崎町　商　同　島村勘三君　二八
同浅草高原町　同　同　山崎友八君　二六
同本所區中之郷建町三二　同　同　柏木倉太郎君　四三
同浅草山の宿町　鼻緒商　同　小島辰之助君　一〇
同　同　同　吉本元四郎君
同　同　同　中村某君
同日本橋本石町四ノ一九　村雲藩人幹事　同　瀧口とく子君
同京橋區入舟町三ノ二　同　同　前原はつ子君
同小石川指ケ谷町九二　同　同　坪内ふく子君
同京橋區入舟町一ノ一　同　同　矢野やす子君
同本郷二丁目四上野金三郎方　同　同　井上みき子君
同　同　同　上野梅子君
同小石川大塚仲の町本傳寺　同　同　同　初子君
小石川白山前町　同　同　山口はる子君
東京麻布郡大島町　日宗大學　學生　日蓮　眞田てつ子君
日大學宿舍
相模片瀬常福寺内　同　顯本　谷本義純君
東京浅草田原町一ノ一國　同　同　藤田一統君
相模片瀬法泉寺　商　同　西川要次郎君
東京下谷區谷中初音町本藤寺　住職　日蓮　大森玄哲君
同内藤新宿淀地九　同　顯本　笠原琢瑞君
同山市旭町　商　日蓮　鹽崎熊吉君
相模大磯鎮町　農　魔門教會　山海明八郎君　六〇
商　日蓮　黑川彦兵衛君

同　同　高木よし君
同茅ヶ崎我孫會　同　同　熊井武兵衛君
同　同　同　仝　茂吉君
同　同　同　龜井繁造君
同　同　同　新倉彌七君
同　同　同　仝　浅吉君
同　同　同　仝　甚八君
東京麻布原郡大崎町　僧侶　同　磯野本精君
相模片瀬龍口寺執事　日宗大學　僧侶　日蓮　片野玄貞君　三二
同　東洋大學　同　同　塩崎玄仁君　三〇
東京品川統一社　新聞記者　同　高鍋天統君
相模藤澤神統一社　早稲田　同　大橋敏郎君　二五
筑前生　商業科　同　田村玄禪君
名古屋唯一佛教團　唯一佛教記者　同　中村智寛君
鎌倉獅子王文庫　日宗記者　同　柴田頭秀君
山梨縣小井川村妙泉寺東洋大學　天臺主事日蓮　加藤文雄君　二二
武藏在屋郡池上村馬込　東洋大學文科　日宗　同　柴田なか子君
武藏八王子本立寺内　日宗記者　日蓮　松本郡太郎君　四一
東京日本橋區新崎町四ノ一　講習會幹事　綜護士　同
同下谷區北稻荷町蓮城寺　國士舘前生　若谷學　同　山田一英君　三五
同麻布郡大崎町上關ケ谷三ノ丹後谷津　日宗大學教授　同　柴田一能君
同浅草區南馬山町法成寺　埼玉柏壁　顯本大學教授　顯本　關田養叔君
同　同　科谷町蓮印寺　同　山根日東君
計　一百四十二名

報道

天晴會第七例會

僅に本年一月を以て、呱々の聲を揚げたる天晴會は、日蓮上人研鑽に於ける、現時最も有力なる團體として、偉大なる反響を社會に與へ、會運また漸く隆んにして、今や軍人、學者、教育家、法曹家、實業家、宗教家等の眞摯敬虔なる多數の名士を會員と爲すに至り、各會員が求道渇仰の熱誠は、會を累ぬる毎に倍々加へ來り、其の第七例會を七月三日(第二土曜)を以て、東京一ッ橋學士會に開けり、此日來會の先登第一は林旅團長にして、幹事の一人は「林さん大層れ早いですナ」と挨拶すれば、謙遜にして而も眞摯なる少將は「イヤ早く來て皆さんの話しを御聽きしようと思ふて、時間の來るのを待つようにして、役所から直ぐ來たのです」といふ、續いて吉田海軍中佐入り來り「天晴會は發會已來不思議に雨が降りません、今日も入梅中でも吃度降らないと家族の者に斷言したのです……」と言へば、「世間には隨分とソー云ふ不思議がある、天長節には雨が降つたことはない」と林少將が語る、斯る中に、小笠原子爵、五島子爵、本多日生師、富田海音師、板

倉代議士等續々と來會し、洋裝、和裝、軍裝、梵裝、各々卓を圍みて世間談出世間談はては小笠原子を動かしたる忠僕論などいと盛んなり、時に定刻四時を過ぐ、「成る可く西洋時間に願いたい」との吉田中佐の注文が出づれば「至極賛成」と富田師が相槌を打つ、されど肝心の當番講師清水龍山師いまだ見えず、さらば後席の本多師にとのことにて、師の將に演壇に起たんとする刹那、清水師駈け附け來り、流汗を拭ひつゝ講演を試む、題は「法華經に就て」なり、曰く

日蓮上人を研究せんと欲せば、上人の依經たる法華經を研究せざる可らず、抑も此の經の研究たる、和漢古今に於て、文學教理南方面に亘りに討尋せられ、文學者は多く詩歌文章の材として用ゐたるも、文章等に就て詳りたる者多し、本多師の法華經講義に引用せる如く服部天遊の赤裸々、富永仲基の出定笑語などは種々誹謗の言あるも、此の經が一代佛教を併呑統一せんとして與れるを認めたり、此他二三の說あるも多くは堂に昇らざる者なり日蓮家の法華經は本化上行の解了上に融化して一種特別の深味を發揮せり、前田博士は讀大乘經典法の中に、世間の讀書眼以上に、哲學的歴史的文學的觀察の必要を述べてあり、予は更に教理眼及び信仰眼の二面の觀察を加へられんことを希望す、佛の無想の心が有相の文字となりしは法華經なり、されば日蓮上人の如きは勤持品などを讀む時は宛然自己の事を說きし感ありしなり云々

にて講演時間は二時間半に亘り直に晩餐に移り、例に依て食堂内は和氣靄々たる樂天地と化し清論快話四隅に湧き、興趣横溢せる中に山田幹事に依て新入會員海軍々令部參謀海軍中佐齋藤七五郎君及び海軍少佐櫻井眞清君の紹介あり、續いて柴田幹事は起つて、本會々員參謀本部員井上少佐が不日非律賓へ旅行せらるゝに付、同君の爲めに乾盃を擧げ以て健康を祝する旨を告げ、一同起立して盃を擧げ以て萬歲を三唱し、更に關田幹事は吾々會員は前月例會講演にて井上少佐の「遍羅の佛教觀」を聞き大に利益を得たり、他山の石以て我玉を磨くべしの例もあればヒリッピン島の宗教狀態をば可成詳細に取調べてノート中に滿收し來りて更に本會にて報告あらんことを井上少佐に囑望し、少佐の是れに對する挨拶ありて一同食堂を出て少憩中、山根幹事に依て本會成立已來六ヶ月間に於ける會計報告ありて後、本日の第二席當番講演者境野黃洋氏病氣欠

席の爲め臨時に本多日生師に依り補講せらる可き旨を告げ尋いで本多日生師は「日蓮上人に對する誤解に就て、其二」を講演せり其要領は

上人の人格に就て世に疑を爲す者あり上人が大に世の迫害と戰ひたる後、身延山に退隱して九ヶ年を送りたるが如きは首尾を一貫せずと云ふにあり、是れ上人の布教及び布教の目的とを知らざるの誤解なり上人は其の布教を以て個人を救濟すると共に、團体の改良を圖りしなり、故に理想を實現し佛陀の本懷を顯揚して社會の組織をも改めんとせり、上人が天皇の詔勅に依て本門戒壇を建立せんと言ひ、公場對決を望みしが如き皆此の思想なり、此考よりして爲政者を諫めたるに聞かざる故退きしなり、上人の退くとは更に大に進むの意なり、大なる準備を爲して時機を得て大に國家全体の風教を改めんとするなり是れ今猶國家諫曉の語ある所以なり、次に上人の主義に就て言へば、世人曰く上人には少しの特長もなしと、是れ上人の教義を知らざるの甚しきものなり、上人の教義には宇宙佛陀吾人に關し諸宗人師の道破せざる大特長あり即ち天台其他の教理には吾人と佛陀等との關係を理論的に厄具を設き、必然的關係を說くこと至れるも意匠的關係を說かず、眞如の如き冷き理以上に眞善美の調和せる物を見るは眞の宇宙觀にして上人は玆に着眼して、關慈的佛界緣起なるものを見たり、是れ本佛觀なり、又人身觀にても世の理佛性の上に事佛性を主張せり、理佛性は潛勢なり、事佛性は顯道なり活現なり色讀なり、而して上人が本佛として觀たるは現身の釋迦實在の佛陀なり吾人に就ては事佛性論あり、若しも是等日蓮主張の特長を除かば、佛教は間の拔けた心理學か辻褄の合はざる論理學位にて終らん、此他教判、修行、信仰等に於て弘法法然以上の大特長は世人の最も注目すべき所なり云々

にて降壇せり、時に夜八時四十分なり、是れにて無事閉會を告げ各自散會せり、此の日會員の出席者約四十名、此の外會員外の傍聽者も數名ありたり、斯る有力なる模範的講演が倍々隆盛に赴くは教團前途の爲め大に祝すべきことなり

○大阪教信　大阪佛教界に立ちて革命の健兒を標榜せる大阪佛教社主催に係る佛教夏期講習會は、去る七月廿一日より廿七日まで泉州濱寺公園地内公會堂にて開會せり、今發會式の概況を左に抄錄せん

佛教夏期講習會　大阪佛教社にては、近來濱寺公園の繁昌に連れ次第に俗惡化するを慨し、殊更に同地を相し眞の信仰を鼓吹し淸淨地と爲さんとの抱負を以て、二十一日より二十七日まで毎日午前八時より午後四時まで同地公會堂にて學者及び各宗碩學を聘し佛教夏期講習會を開く事とし、二十一日午前十時發會式を擧行せり、來賓は知事代理松木事務官、山下大阪市長、大西代議士、中谷大阪市會議長代理者等三十餘名、聽講者約四百名、先づ佛教社主幹松岡良友師の開會の辭、藤連念佛宗管長唐橋大僧正讃佛偈を奉讀、次ぎ高崎知事祝辭（松木事務官代讀）山下市長、日野市會議長（中谷代理者代讀）乾府會議長の祝辭あり、尙北畠男爵、東京淑女佛教研究會長東久世伯夫人及び岸和田の德育婦人會其他の祝電、境野佛教大學講師の演說などありて、正午終了、午餐後筑前琵琶、劍舞等の餘興ありて、午後三時より講習に移り講師境野黃洋師は日本佛教史序論を講述し、午後五時より公開演說を開き井上秀夫師の歐米人の觀たる佛教なる演說あり午後八時頃終了せり、尙二十二日より引續き藤澤南岳翁（實驗學眞相）陸鐵巖（禪學大意）和田大圓（兩部神道論）松本文三郎博士（自力と他力）本多日生（佛陀と吾人）道重信敎（五根）山口晋卿（性）高洲醫學博士（水浴に就て）赤松連城（宗敎と實業）吉谷覺壽（因果の理法）日置默仙（公案拈提）等の諸氏二日乃至三日間連續的に講話を爲す由にて、是等の講師は何れも公園內一力樓を宿所に宛て、聽講者も千兩館、松月亭、善勝寺、淨專寺にて便宜宿泊するを待べし（大阪朝日、廿二日二回）

かくて學祖門下よりは本多日生上人を聘し、本多講師は廿四、五兩日に涉り「佛陀と吾人」と題する講演あり大に佛教徒を覺醒せられたり、右に付大阪眞本法華宗蓮成寺婦人會は右夏講會を贊助し、同寺住職梶木日種師、總代郡山庄兵衛、長尾雅之助、山本源治郎の諸氏婦人會代表長尾すみ子、同やす子等前後幹旋努力し、堂閣寺主古谷師、堺妙滿寺主三好師を始め、京都より は野口僧正、銀井、鈴木、川崎等の諸師、岡山の栗原久滿子女史堺、村上うの子同れい子同家一族諸氏等議講習會に參席一段の光彩を添へたり（加藤生報）

○其二　今回大阪市北區の大火災に付本宗大阪寺院並に檀信徒は、罹災者救恤の爲め八月四日より仝六日まで毎夕市內各方面の要所に道路布敎を開始し、左の警告箋數千葉を配附したり

實在不滅の大佛陀釋迦牟尼如來は常恒不斷に吾人を救護して人生社會に光明と活力とを賦與し給ふ」

慈悲救濟は斯の大佛陀の隨世間の慈悲の一分なり

大火罹災救恤傳道

人類は互に相倚り相扶けて共同生活を爲すものなり

罹災者を救恤するは人類の本義なり

此際此時物價を暴騰せしめ或は賃銀を割增して奇利を貪ぼるが如きは人道の敵なり

仁慈なる市民諸士よ須らく親て金品を寄附し以て罹災者を救恤ぜられよ

明治　十二年八月

顯本法華宗大阪寺院並に檀信徒

初日は島之內、道頓堀方面、第二日は船場の一部、新町網島、九條、堀江、第三日は上町、船場の一部、中の島、江戸堀、京町堀等に傳道し大に世間の同情を促し、傳道隊は玄題旗と「大火罹災救恤傳道」と大書せる旗を翻へし蓮成寺住職梶木日種、堂閣寺住職古谷養眞の二師を始め蓮成寺內の加藤興順、蓮成寺總代長尾雅之助、同山本源治郎、大阪正法護持會員小西源藏等の諸氏、前後二十六ヶ所に各得意の辯舌を振ひて積極的には金品を義捐すべく、消極的には暴利を貪るべからざる趣旨を敷衍して救恤　勵むべき樣警告的の要旨を唱道し、此際各宗各派が金品勸募の實地救護に努めつゝある中に立ちて、佛陀隨世間の慈光と人道の本義を闡明し大に異彩を放ちたり（加藤生報）

編輯餘瀝

秀麗の硯り讀者諸君何れも健在何より目出度し、東都の宗教界も花よりは、實といふ通口にて、これといふて報道する事はなけれども、青年傳道會が石清水迎に就て、味噌をつけたることが、變た出來事である、日蓮盟の勃興は國民にひそめる勇健の氣風を實現する、時代の要求と見るべく、夏期講習會が近來の流行となり、猫も杓子もといふ型の所、天晴會主催の講習會は、講師お何れも熱心なる會員で、その所見は眞摯の確信を發表さられるものなれば、型にはめる講習會と、その趣を異にして居る、その成功は云ふ丈け野暮、田中智學居士が妙宗紙上に載せられたる、雜氣呵責は近來の活文字、記者は讀んで痛快を感じた、その所論は珍らしくない、何人も教義の一端を窺へば、本尊信條の確立位は、認識となければならないに、一トかどの學者樣が、錢のほしさに雜氣に信仰の入門なりと、お澄しなさる人が多い、田中居士の見識の論議は、珍らしくなくとも、線網からいへば矢張清新の問題になる、我等同人は多年この潮流に超越して居る、この點よりいへば田中居士と俱に奮闘すべき善友であると思ふ、雜誌經營の困難はその原因多々あるであろうが、無代讀み藤醫守ときめこむ人があるのは、經營困難の一原因である、もりわけて佛教各雜誌に此種の弊害が、多いように見へる、日宗の活宗教や天晴書館的經營ぜられて、豊富なる記事を讀者に供給せらるゝは、記者の感歎する所である、日宗大學は紀律整然教育行屆き、秀才續出する傾に確かに見受けらるゝ、聖日蓮の大教義を宣揚する人は、他日この大學より出づるであると思へば、記者は俱に提携すべき、善友の健全ならんことを祈るのである

會津妙法寺本堂再建寄附金申込廣告

（第四回）

金一圓四十錢　第五教區正福寺兼務　柄木　日導
金一圓也　同　導什寺
金六十八錢　同　圓光坊兼務　柄木　日導
金六圓也　同　圓德寺住職　秋山　乾英
金二十圓也　同　本宮寺住職　西村　會立
金二十一圓二十錢　第三教區妙行寺住職　石橋　端嚴
金三圓也　同　藥王寺兼務　同　人
金一圓也　同　法光寺兼務　同　人
金二十二圓六十錢　同　本傳寺住職　栗原　日瀧
金十九圓二十錢　同　如意寺住職　井上　日冲
金一圓也　同　勸成寺兼務　同　人
金一圓也　同　善立寺兼務　同　人
金一圓也　同　泰行寺兼務　同　人
金一圓也　同　法光寺兼務　同　人
金一圓也　同　能泉寺兼務　同　人
金二圓也　同　實相寺兼務　同　人
金五圓四十錢　同　妙典寺住職　大津　資淳
金二圓八十錢　同　西谷寺住職　吉富　叡叔
金一圓八十錢　同　安養寺兼務　同　人
金三圓四十錢　同　妙教寺住職　門倉　玄要
金一圓也　同　香田寺
金三圓四十錢　同　妙照寺住職　前田　幸信
金六圓六十錢　同　東光寺住職　池澤　快豊
金二十圓也　同　來光寺
金四圓八十錢　同　紫雲寺
金六圓六十錢　第二教區圓能寺住職　寺田　泰正
金六圓也　同　正覺寺住職　廣部　玄通
金三十圓也　第六教區蓮照寺住職　野口　日主
金三十五圓也　同　本國寺住職　板垣　日瑛
金三十五錢也　同　法光寺住職　日比野　日運
金三十五圓也　同　本福寺兼務　井村　日成
金六圓六十錢　同　三光寺住職　小竹　俊雄
金四圓也　同　正國寺住職　北田　都昌
金七圓也　同　清瀧寺住職　渡邊　玄雅
金一圓四十錢　同　來傳寺
金二圓八十錢　同　淨眼寺
金二圓八十錢　同　圓城坊
金十三圓三十錢　同　東光寺住職　草切　榮玉
金六圓十五錢　同　本成寺住職　井澤　宗俊
金三圓　同　妙本寺兼務　小川　日豐
金二十圓也　第七教區法華寺住職　三上義徹
金二十圓也　同　妙覺寺住職　松井　道安
金三十圓也　同　本隆寺　小川　日曼
金十八圓六十錢　同　妙善寺住職　佐野　日慥

暑中御伺

各位益々御清榮爲法奉賀候降て弊舗儀御高庇を蒙り店運日に隆盛に赴き感荷に不堪候
尚將來幾久敷御用仰付被下度弊舗は誠實と廉價を以て平生の御愛顧に願ひ可申候敬具

京都市衣棚通三條上ル　草木伊助
東京市下谷南稻荷町四　草木支店

顯本法華宗御寺院各位

御待ち兼ねの

大石養淳著
日蓮宗說教書　發刊となる

七月五日より悉く豫約申込者へ頒了せり
本價一圓の處初刊の法喜として五百名を限り金八十錢にて應ずべし送料は本社持ち（但し代金引替は此限りにあらず
但し五百名に至れば何時にても謝絕すべし

發行所　後志國古平港　古平町二六三　北天教光社

管長大僧正本多日生師序
文學博士三上參次先生序
僧正野口日主師題字
故僧正清瀨貞雄師著

興國の宗教

菊判五號活字
二百頁全一冊
定價金五十錢
郵稅六錢

本書に戰勝新興國たる大日本國民の選擇すべき宗教問題を論道したる大文字にして筆力縱橫理義條然宗教家は勿論苟くも靈の糧を要する求道の士は必ず一本を購ふべき要書なり

東京府荏原郡品川町南品川宿四一二番地
發行所　統一團（振替貯金東京一二一九番）
東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
發賣所　須原屋（振替貯金東京四九六〇番）

改名日主　野口義禪

天晴會主催 夏期講習會特志義助金芳名錄

一金六拾九圓也　統一團扱 統一既掲）
一金壹圓　赤羽宥松殿
一金拾圓　岡山日蓮研究會殿
一金拾圓　藤原日逸殿
一金五圓　岡山本化法王會殿
一金五圓　甲府 土屋儀八方梅子殿
一金壹圓　同 內藤玄子殿
一金一圓　山梨縣昌福寺 深澤湛善殿
一金一圓　大覺寺 大寺 飯久保顕學殿
一金參圓　天鼓社 下里是經殿 柴田顯秀殿
一金二圓五十錢　池上本門寺殿
一金二圓五十錢　仝執事 田中義孝殿 鏡木是妙殿 鈴木日体殿
一金五圓　村雲婦人會殿
一金十圓　仝幹事九名殿
列名左に
濱口登美子　熊原はつ子
坪內婦久子　矢野やす子
井上みき子　上野梅子
上野つま子　山田はま子
眞田てつ子
一金三圓　小室山 大木日普殿
一金一圓五十錢　全千如院 大野實依殿

一金壹圓　野村智秀殿
一金壹圓　佐藤茂八殿
一金二圓　佐治吉右工門殿
一金拾二圓　子爵 小笠原長生殿
一金壹百圓　獅子王文庫 同志者殿
一金壹圓　西谷龍顕殿
一金二圓　統一新聞社殿
一金二圓五十錢　藤賀秀太郎殿
一金二圓　渡邊玄林殿
一金一圓　備中高松 濱本繁太郎殿
一金十圓　松森靈運殿
一金三圓　天鼓在京同人 本化同心會殿
一金二圓　子爵 五島盛光殿
一金十五圓　小泉日慈殿
一金五圓　風間隨學殿
一金十圓　岩戸満次郎殿
一金五圓　淸水龍山殿
一金五圓　富田海音殿
一金五圓　柴田一能殿

一金參拾七圓五十錢　日宗新報扱（日宗新報既掲）
一金十圓　身延久遠寺殿
一金二圓五十錢　前代智明殿
一金二圓　鎌倉大巧寺 飯田日靜殿
一金一圓　西川要次郎殿
一金一圓　六浦 高原泰讓殿
一金十五圓　光則寺 淸水梁山殿
一金一圓　村野日彰殿
一金五圓　細野少佐殿
一金五圓　松本郡太郎殿
一金一圓　柴田なか殿
計金四百十三圓五十錢

一金二圓　中村孝敬殿
一金二圓　釋 覺圓殿
一金二圓　風間淵靜殿
一金二圓　稻田海素殿
一金五圓　山田一英殿
一金一圓　勝田日進殿
一金一圓　磯野日治殿
一金二圓　大貫忠次郎殿
一金五十錢　山田英源殿

一『信仰の力』一百部　甲府 土屋儀八殿
一寶塔偈及當体義抄二百部　獅子王文庫殿
一『日蓮主義』一百部　統一新聞社殿
一『統一新聞』近刊二百部　信教新聞社殿
一『信敎新聞』近刊三十部　天鼓社殿
一『天鼓』七號五十部　統一團殿
一『統一』七月號三十部　大貫忠次郎殿
一團扇一百本（天晴會に因める新意匠）

右御芳志忝く正に領取仕候也

天晴會幹事

（三法堂目印）

●大佛具 木像子 大販賣

佛書表具の元祖
各宗御寺院御入用品一切何にても多少に不限御注文仰付らるべし佛書は申すに不及御肖像書專門
木魚位牌卸小賣

小包條例附 郵券四錢
三法堂諸品發賣目錄（正價付）

注意 一佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐになれば御寺院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

●佛書佛具一切●過去帳の類●大般若經●一切藏經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲錄●香爐●天蓋●大傘●[illegible]●[illegible]●木像●[illegible]●數珠●[illegible]●[illegible]●[illegible]●業器●[illegible]●三寶物●[illegible]●[illegible]●[illegible]●茶器●香具●[illegible]●自鉢●木版●[illegible]●[illegible]●製本●文庫●[illegible]●[illegible]●正札にして御買物座ながら自由自在（電話ニ七八三番、振替貯金大阪ニ〇七ニ）

各宗御本山御用達 京都小橋三條通中島町西入
各佛書佛具師 仝町小橋東入下ル
三法堂 藤田總治
三法堂陳列場

誌則

一發行期日　每月一回十五日
一誌料　一冊金六錢、十二冊前金六十五錢
郵券代用は一割增、但五厘切手を可とす
一廣告料　一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五圓マデ
一購讀申込　住所氏名を楷書にて認められたし
一代金拂込　振替貯金を便とす、拂込用紙は最寄郵便局より受取られたし、但し此の場合は誌料の外に金貳錢を振替口座手數料として餘分に拂込ありたし

明治四十二年八月十五日印刷發行

發行人　井村日咸
編輯人　山根日東
印刷人　鈴木日雄
印刷所　北澤活版所

東京府荏原郡品川町大字南品川宿四百十二番地
發行所　統一團
（振替貯金番號東京一二一九）

統一

第百七十五號

明治三十年二月十四日　第三種郵便物認可（毎月一回十五日）發行
明治四十二年九月十五日（毎月一回十五日）發行